



求道

第 六 卷
第 六 號

求道第六卷第六號目次

求道

◎誓願の綱をとるべし

自督

◎親鸞聖人の信仰

講話

◎不可思議の信

聖傳

◎チャータカ釋尊傳

第廿五 賭に勝ちし牡牛

第廿六 老婦の黒牛

告白

◎分つたと云ふは分らぬなり

哀悼

◎嗚呼珠光院唯信居士

歎咏

◎明日 (長詩)

増田八風

◎海 (同)

同

時報

◎清澤先生七周忌◎求道學舎第七回紀年日◎夏期傳道日割

◎夏と精神修養

近角常觀

附録

講話

暑中

但左記の日に當りて臨時開講す

七月四日、十八日

求道學舎

七月十七日

第二求道會

講休

九月十九日曜より總て開講す

求道第六卷第六號

誓願の綱と執るべし

親鸞聖人の法然上人に遇ひたまふや、實に聖覺法印の勸むるところに出づるといふ。傳へいふ、聖人六角堂に參籠しまひ、求道の煩悶遣る所なく、拂曉四條橋上を過ぎりたまふや、偶々聖覺法印に邂逅したまふ、法印聖人の顔容憔悴せるを見て其由を問ふ、聖人乃ち十年來の求道正に其極に達し、今や進退、往返、其之く所を知らざるを訴へ、内心の苦惱を披瀝して、審さに胸底の秘奥を傾く、此時法印亦自己が法然上人に遇ひたてまつりて、初めて易行念佛の道に入れることを告白し、聖人も亦法然上人を尋ねたてまつるべきを慫慂す、聖人直に叡山に歸り、衣を改めて即刻吉水の禪房を叩きたまふ、此に於て法然上人乃ち選擇本願を説きたまひて、專修念佛の旨を授けたまふ、是傳文に『殊に宗の淵源を盡し、教の理智を極めて之を述べたまふ』といふ所以也。西方指南鈔に

は聖人自ら法然上人の説法を記して曰く

抑々法藏菩薩いかなれば餘行をすて、たゞ稱名念佛の一
行をもて本願にたてたまへるそといふにこれに二の義あり。一には念佛は殊勝の功德なるがゆへに、二には念佛は行しやすきにて、諸機にあまねきがゆへに。はじめに殊勝の功德なるがゆへにといふは、かの佛の因果總別の一切の萬徳、みなことごとく名號にあらはるゝがゆへに、一たびも南無阿彌陀佛となふるに大善根をうるなり。こゝを以て西方要決に曰く、諸佛願行、成此果名、但能念號、具包衆徳、故成大善、不廢往生といへり。またこの經にすなはち一念をさして無上功德とほめたり。しかれば殊勝の大善根なるがゆへにえらびて本願としたまへるなり。二には修しやすきがゆへにといふは、南無阿彌陀佛とまふすことは、いかなる愚癡のものも、をさなかも老いたるも、やすくまふさるゝがゆへに、平等の慈悲のおこころをもて、その行をたてたまへり。もし布施を以て本願とせば、貧窮困乏のともがら、さだめて往生ののぞみをたゞむ。もし持戒をもて本願とせば破戒無戒のたぐひ、また往生ののぞみをたつべし。もし禪定をもて本願とせば、散亂鹿動のともがら

往生すべからず。もし智慧をもて本願とせば、愚鈍下智のもの往生すべからず。自餘の諸行もこれになすらへてしるべし。しかるに布施持戒等の諸行にたえたるものは、さばめてすくなく、貧窮破戒散亂愚癡のともがらははなはだおほし。しかればかみの諸行をもて本願としたまひたらましかば、往生をうるものはすくなく、往生せぬものはおほからまし。これにて法藏菩薩平等の慈悲にもよあされて、あまねく一切を攝せむがためにかの諸行をもては往生の本願とせず、たゞ稱念佛の一行をもて、その本願としたまへるなり。かるがゆへに法照禪師のいはく、於未來世惡衆生、稱念西方彌陀號、依佛本願出生死、以直心故生極樂と云ふ。又のたまはく

彼佛因中立弘誓、聞名念名總迎來、
不簡貧窮將富貴、不簡不智與高才、
不簡多聞持淨戒、不簡破戒罪根深、
但使回心多念佛、能令瓦礫變或金。

かくのごとく誓願をたてたりとも、その願成就せずは、またたのむべきにあらず、しかるにかの法藏菩薩の願は一に成就して、すでに佛になりたまへり。その中にこの念

聖人之を味ひ、之に註し、平生信者に對して、之を熟讀すべきことを命じたまふ、唯信鈔を繙くときは坐ろに嘆異鈔の源泉を見出したるが如き心地する也。吾人は如何に選擇本願をきくと雖、其大慈大悲の誓願の不思議を信せずんば其證なし、如何に稱念佛すと雖、不可稱不可說不可思議の名號不思議を信じたてまつらずんば其甲斐なし。唯誓願の不思議を信ずべし、たゞ名號の不思議を信ずべし、聖覺法印唯信鈔に曰く、

信心といふは、ふかく人のことをたのみてうたかばざるなり。たとへばわがために、いかにもはらくろかるまじくふかくたのみたる人のまのあたりよくくみたらんところをよしへんに、そのところにはやまあり、かしこにはかはありといひたらむをふかくたのみて、そのことばを信じてむのちに、また人ありてそれはひがことなり、やまなしかはなしといふとも、いかにもそらごとすまじきひとのいひてしことなれば、のちに百人千人のいはんことをはもちあらず、もとまじしことをふかくたのみ、これを信心といふなり。いま釋迦の所説を信じ、彌陀の誓願を信じてふたこゝろなきことまたかくのごとくなるべし。いまこの信心につきてふたつあり。ひとつにはわが身は罪惡生死の凡

佛往生の願成就の文にいはく、諸有衆生、聞其名號、信心歡喜、乃至一念、至心回向、願生彼國、即得往生住不退轉と云。次に三輩の往生は、みな一向專念、無量壽佛といへり。この中に菩提心等の諸善ありといへども、かみの本願にのぞむるに一向に、もはらかの佛の名號を念ずるなり。云云。

是實に選擇本願の眞意、選擇集に於て法然上人の自ら記したまふところと全く同一にして、又唯信鈔に聖覺法印の記したまふと符合して、法照禪師の文を引用するにいたるまで唯信鈔及西方指南鈔全く同一筆法に出づ。嗚呼これ聖人が直接法然上人の教化を寫したまふもの、吾人生きて現代に此聖訓を拜讀す、噫感謝極りなし。而して聖人唯信鈔文意を作りて、聖覺法印の法語を解し、殊に法照禪師の偈文を縱横反覆して、親切を極め盡したまふ。吾人は此等の諸書を對照し來りて黒谷門下に法印及聖人が選擇本願を信受したまひし當年を想像して、感泣極りなし。

聖覺法印も妻帯の人、自ら愚禿と名のりたまふ、聖人も亦同し。法印は信空蓮生と共に信の座に列したまふこと亦聖人と同心一體なり。殊に法印書名に題して、唯信鈔といひ、

夫曠劫よりこのかたつねにしづみ、つねに流轉して出離の緣あることなしと信ず。ふたつには決定してふかく阿彌陀佛の四十八願衆生を攝取したまふことをうたがはざれば、かの願力にのりてさだめて往生することをうと信ずるなり。よの人つねにいはく、佛の願を信ぜざるにはあらざれども、わが身ほどをはからふに、罪障のつもれることはおほく善心のおこることはすくなし。こゝろつねに散亂して一心をうるることかたし。身とこしなへに懈怠にして精進なることなし。佛の願ふかといふともいかでかこの身をむかへたまはんと。このおもひまことにかしこにたり。憍慢をおこさず、高貴のこゝろなし、しかはあれども佛の不思議力をうたがふとがあり。佛いかにかりのちからましますとしりてか罪惡の身なればすくはれがたしとおもふべき、五逆の罪人すらなほ十念の功によりて刹那のあひだに往生をとく、いはんやつみ五逆にいたらず、功十念にすぎたらんをや。つみふかくばいよ極樂をねかふべし、不簡破戒罪根深といへり、善すくなくばます彌陀を念すべし、三念五念佛來迎とのたまへり。むなく身を卑下してこゝろを怯弱にして、佛智不思議をうたがふことなかれ。

たへば人ありてたかきしものしもにありてのぼることあ
 たはざらん、ちからつよきひときしのうへにありてつな
 をおろして、このつなにとりつかせてわれしものうへにひ
 きのぼせんといはんに、ひく人のちからをうたがひてつな
 のよはからむことをあやふみて、手をあさめてこれをとら
 ずは、さらにきしのうへにのぼることをうべからず。ひと
 へにそのことばにしたがふて、たなごころをのべてこれを
 とらんには、すなはちのぼることをうべし。佛力をうたが
 ひ願力をたのまざる人は菩提のきしにのぼることかたし、
 たゞ信心の手をのべて誓願のつなをとるべし。佛力無窮な
 り、罪障深重の身をおもしとせず、佛智無邊なり、散亂放
 逸のものもすつることなし、たゞ信心を要とす、そのほか
 をかへりみざるなり。

嗚呼人生幸に此南無阿彌陀佛の綱あり、此誓願の強力あり、
 愛波に溺れ、火坑に陥らんとする我等唯此誓願の綱を執るべ
 し、信ぜんと企て、信ずるにあらず、稱へんとして稱ふるに
 あらず、信ぜざらんとするも信ぜざるべからず、稱へざらん
 とするも稱へざるべからず、岸の下にあるものは岸上の事は
 知るべからず、自ら岸上に昇りて能く知り得たるの後綱を執

つる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。た
 とひ法然上人にすかされまゐらせて念佛して地獄におちたり
 ともさらに後悔すべからずさふらふ』と。唯善導大師、法然
 上人と共に同じ誓願の綱をとるのみ。聖覺法印も此綱をとり
 たまふ、我聖人も此綱をとりたまふ。四海の中皆兄弟たり、
 同一に念佛して別の道なきがゆへに、唯不可稱不可説不可思
 議の選擇本願念佛南無阿彌陀佛を信じたてまつるのみ。
 覺聖法印法然上人を讚じて曰く、

誠知無明長夜之大燈炬也、何悲智眼闇。生死大海之大船筏
 也、豈煩業障重。情思教授恩德、實等彌陀悲願者歟。粉骨
 可報之、摧身可謝之。

聖人和讚に曰く、
 無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな
 生死大海の船筏なり、罪障おもしとなげかざれ。

如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報すべし
 師主智識の恩徳も、ほねをくださても謝すべし。
 南無阿彌陀佛。

らんにはいかにも確かなるべけれど、岸上に昇り得ん人は
 何ぞ綱を執るの要あらん。歎異鈔に曰く、煩惱を断じなば、
 すなはち佛なり、佛のためには五劫思惟の願その詮なくやま
 しません、と。岸上の人は岸上の人のみ知る、唯佛與佛の境、
 一步と雖岸に達せざるもの、知るべきことにあらず。執持鈔
 に曰く、往生淨土の爲には、たゞ信心をさきとす、そのほか
 をばかへりみざるなり、往生ほどの一大事凡夫のはからふべ
 きことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべし。
 すべて凡夫にかぎらず、補處の彌勒を初めとして佛智の不思
 議をはからうべきにあらず、まして凡夫の淺智をや、かへす
 く如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなりと。嗚呼我
 等は唯岸上の聲をさくのみ、我等は岸上より下れる綱を執る
 のみ、唯不可思議の招喚なる哉、不可思議の名號なるかな。
 『彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をとぐるな
 りと信じて念佛まうさんとおもひたつころのおこるときす
 なはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり』、『親鸞にお
 きてはたゞ念佛して彌陀の助けられまゐらすべしと、よき人
 の仰をかうむりて信ずるほかに外の仔細なきなり、念佛はま
 ことに淨土に生るゝたねにてやはんべるらん、また地獄にお

自 督

親鸞聖人の信仰

私は久し振りに此の御誕生會に遭遇しました事を喜んで居
 ります。そこで私が聖人の御信仰を喜ばして戴いて居ります事
 を述べて見やうと思ひます。其の事は常に申して居ります事
 で、少しも變つた所はありませぬが、只、昨今殊に喜んで戴
 いて居るもの、二三を擧げて皆様と共に喜ばして戴きたい次
 第であります。平生私が非常に感じて居る事は親鸞聖人が廿
 九歳に御入信になる次第柄で、十九歳の時河内の磯長の聖徳
 太子の廟に參籠せられたる時、

「我三尊化塵沙界、日域大應相乘地、諦聽々々我教令、汝命
 根應十餘歲、命終速入清淨土、善信々々眞菩薩」

の告勅があつた事は古來より言ひ傳へて居る事で、私も信じ
 て居りましたが、先達傳道中幸に此の六句の偈が確かに聖人
 の求道の動機でありました事を明らかにしました。今日迄十

九歳聖徳太子の夢告の事、廿九歳の六角堂に參籠して法然上人に遇はれたるは確實な事實であると信じて居ましたが、此偉大なる事實を尊信することの足らざりしを思ふて今更慚愧に堪えない事であります。扱考て見ますると此告勅已後廿九歳の時法然上人に遭はるゝ迄の生涯は救の親を求むる心持であつた。上人に遭はれたとき我より求めるのではない、親様が昔より我を尋ね求めて居て下さつた御慈悲に氣附かれたのであります。故に晩年になつて其信念を書かれた愚亮鈔の中に、

信受本願 前念命終 即時入正定聚之數文

即得往生 後念即生 即時入必定一文 又名必定菩薩一文と仰せられた。此前念命終、後念即生を信仰の一念にて頂きたまひしは、即告勅の命終速入清淨土の實況が現はれたのであります。即ち聖人が十九歳の時磯長の太子の汝命根應十餘歳の夢告がありましたから十年を経て二十九歳の時矢張聖徳太子建立の六角堂に參られたが、丁度四條橋上で聖徳法印に遇はれたが因縁となりて、法然上人に遇ひ選擇本願のいはれを聞き一念開發して凡夫直入の真心決定したまひた。而して聖人に就て感ずる事は、法然上人を如何に考へられたかと

ベシト、ヨキヒトノオホセヲカウムリテ信ズルホカニ別ノ仔細ナキナリ(乃至)タトヘ(法然上人)ニスカサレマイラセテ、念佛シテ地獄ニ落チタリトモ、サラニ後悔スベカラズサアラフ」と師を信ぜられた。このヨキヒトとあるが即ち眞の善知識といふことでもあります。

先日美濃で基督教の人で佛教に於ける佛の人格の不明であると言ふて居た人が告白しました。他力の信仰は有り難いが、親鸞聖人は僅かに法然上人の人格を通じて佛の人格を認めたと云はねばならぬ。「ヨキヒトノ仰セヲカウムリテ信ズル外ニ別ノ子細ナキナリ」とあると。なるほど譯なしに法然上人の言はるゝ儘にするといふならば殆ど冒險的に信ぜられたといふ事になります。かういふ風に歎異鈔を伺ふならば間違ひであります。善き人の仰を信じたのには違ひなきが、其仰は「タッ念佛シテ彌陀ニタスケラレマイラスベシト」といふことである、たゞ念佛して彌陀に助けられまいらすべしとは彌陀の本願である。其本願はたゞ念佛してとあるからは餘行餘善ではない念佛のみであります。彌陀の本願は戒律で助くるのではなく、たゞ念佛して助けらるゝのであります。して見れば法然上人の人格を通じて佛を信ぜられたのでない、法然上人の

言ふ事て、聖徳太子は歴史上隔りたる聖人の理想の人、法然上人は同時代の面授口決の御方であります。然るに時代の隔りたる聖徳太子に直々に告勅を受けて面接せられたも同様であり、又直々に遇はれた法然上人は親鸞聖人の眼には如何に映じたか。實に聖人に取つては現代の上人が即ち又理想の御方で智慧の權化の御方でありました。故に法然上人について書かれましたものを拜見しますると如何に考へられたか分ります。源空上人和讃の中に、

諸佛方便トキイタリ、源空ヒジリトシメシツ、無上ノ信心オシヘテゾ、涅槃ノカドヲバヒラキケル、

眞の知識ニアフコトハ、カタキガナカニナオカタシ、流轉輪廻ノキハナキハ、疑情ノサハリニシクゾナキ、

實に源空上人が日本に顯はれ給ひて選擇本願を述べ給ふたは千劫萬劫に遇ひ難い事て、若し上人無かりしならば、流轉輪廻の際なきは明らかなことであるのに、幸なるかな上人の出世したまひしは諸佛方便とさいたりたるのである、これ親鸞がための眞の善知識であると感謝したまひた。其信念を披瀝したまひしは歎異鈔第二章であります。

親鸞ニオキテハ、タッ念佛シテ彌陀ニタスケラレマイラス

仰せたる選擇本願夫自身を信ぜられたのである、師匠の言であるからといふて無暗に信じたといふのではない。

「親鸞ハ父母孝養ノタメトテ念佛一遍ニテモマウシタルコトイマダサフアラハズ」と父母孝養の爲に念佛一遍も唱へぬごとく、奉持師長の爲めにも一遍も稱へたまふ筈はない。たゞ念佛して助けらるべしとの本願を信ぜられたのであります。夫も信ぜようと思ふて信じたのではない、信ぜずには居られぬのである。何故なれば十年以來色々試みたれども、坐禪戒律何れの行も及びがたきものである。しかるに彌陀の本願はたゞ念佛してたすけたまふとの大慈悲である、之を信ぜずには居られぬ。たとひ法然上人に欺かれたとするも此本願を信ぜずには居られぬ。法然上人を信じたから本願を信ずるといふのではない。本願を信じてみれば、たとひ法然上人が虚言をいふても信ぜずには居られぬ。併其本願がまことたる以上は法然上人の仰眞ならざるべからず。故に「彌陀ノ本願マコトニオハシマサバ善導ノ御釋虚言ナルベカラズ、佛說マコトニオハシマサバ善導ノ御釋虚言シタマンベカラズ、善導ノ御釋マコトナラバ法然ノオホセ虚言ナランヤ、法然ノオホセマコトナラバ親鸞ガマウスムホマタモテムナシカルベカラズサアラフ

カ」とある。法然の仰まことならば彌陀の本願まことであると
はない、彌陀の本願まことならば夫を傳ふる法然上人の仰ま
ことである、上人は直に是れ智慧の念佛の權化勢至菩薩であ
る。考へて見れば九十年の生涯は、觀音の化身でありませぬ聖德
太子と、勢至の化身たる上人に手を引かれながら如來の本願
をひろめたまひたのである。

さてかくの如く二菩薩の引導に順じて、頂きたまへる上人
の自督の有様は如何、私は教行信證を永々拜讀して居ました
が、今年初めて氣附きました事があります。嘗て私は信卷
の終りに、阿闍世太子が苦悶の状態になられて終に信仰に入
られたとあるを見まして、私が煩悶して信仰に入りた心の有
様と少しも異なることなきを見て、是實驗の文字である、況ん
や其前に、誠知悲哉愚禿沈沒愛欲廣海云々の文を見て、益々
聖人の實驗であることを確信して居りました。而して教行信
證の總序に然則淨邦緣熟調達闍世與逆害云々といひ、又信卷別
序に開闢真心顯彰大聖矜哀善巧とあるは、たしかに此事であ
る。しかるに此の如き人生の出來事によりて内心の本願を信
受せられたる自督を寫されてあることを深く氣附きませなん
だ。即ち此度信卷別序に夫以獲得信樂發起自來選擇願

くといふが我等は召喚の聲をきくのである。愚禿鈔に「西岸
上有人喚言者、阿彌陀如來誓願也」といふてある。即ち大悲の
親の喚び給ふ聲であります。「汝言者行者也、斯則名必定菩
薩、」即ち人生に苦んで居る私に汝と喚びかけられた。喚びか
けられたときハイと氣がついた處に如來の子といふ自覺を生
ずるのであります。「一心之言眞實信心也、正念之言選擇攝取
本願也、又第一希有行也金剛不壞之心也」て、親の御呼び聲が
聞えるなり、其の仰せを信するが一心である。口にあらはれる
が念佛である。「我能く護らん」我とは盡十方無碍光如來也不
可思議光佛なり、これ實に大悲の親の御姿である。能の言は
不堪に對する言である、やはりよからんものをこそたすけた
まはんずれといふか不堪で即疑心の行者である。此罪惡の凡
夫なればこそ助けたまふと御受した心持が能くである。汝を
護らんとは攝取不捨である。此意味を善導和讃に、

釋迦彌陀ハ慈悲ノ父母、種々ニ善巧方便シ、ワレガ無上
ノ信心ヲ、發起セシメ給ヒケリ。

人生の出來事にて種々の善巧方便を蒙るは、結局如來召喚の
親心を信ぜしむるためである。

五濁惡世ノワレヲコソ、金剛ノ信心バカリニテ、ナガク生

心と申された自督を、信の卷の始、愚禿鈔に示されてありま
すことが氣附きました。即ち二河白道の喩は是であります。

此の二河白道を人生問題により本願を信するの有機に引き
あて、見ますると、此人既至空曠迴處更無人物」とは、人
生茫茫として恰も沙漠に迷へるが如き有機である。無人空迴
とは善智識のない事を顯はして居ます。かく迷ふて居ます後
から群賊惡獸が追ひつめ來りて如何ともする事が出來ませ
ぬ。即ち現今の我等は煩惱熾盛なること恰も蛇が毒舌より火
を吐いて來るやう。瞋悲は屢々起り來りまして十年の交りも
忽ちに燒きて仕舞ふやうになります。如何に修養の善心を起
すも、一點の欲心のために汚されて仕舞ふ、我等進退如何とも
すべからざる有機を「我今廻亦死住亦死去亦死一種不免死」
といふてあります。かくの如く煩悶懊惱極まりて、進むに道
なく退くに處なく、人生一點の光なく、一人の友なく、如何
ともすべからざる時初めて大悲召喚の聲がきこえて下さつた
のであります。曰く「西岸上有人喚言、汝一心正念直來我能
護汝衆不畏墮於水火之難」と、是本來の親の面目に接し、
親の御聲が聞えたのであります。禪家に本來の面目を見ると
いふが我等は大悲の親の御顔を仰ぐのである。隻手の聲をき

死ヲステハテ、自然ノ淨土ニイタルナレ。

實にこのこそその文字、惡人正機をしめし、ばかりの文字人生
唯一の大悲を示されたのである。

金剛堅固ノ信心ノ、サダマルトキヲマチエテゾ、彌陀ノ心
光攝護シテ、ナガク生死ヲヘタケル。

まちえてぞは大悲の親が今日まで待ちて下されたのでありま
す。心光攝護は是れ實に我れ能汝を護らんの味であります。
即大悲攝取の慈懷に抱かれた有様であります。

私は最う此れで外に言ひます事がありませぬが、兼て一度
御話し致さうと思ふて居ました香樹院の逸話二つを附け加へ
ましょう。嘗つて美濃と承つて居りまするが一人の信者、素
香樹院に隨ひ佛の慈悲を戴きて居た者が、病氣になりました
時、一代の惡行爲を思ひ出し、我が身は罪深き者である、自分
は地獄に墮ちるべき者であると、非常に悲しみました。する
と一人娘ありて平生親に聞きたる通りを繰返して、どうか安
心して下されといふ。親は「其れはお前は若いから分らない、
今自分が墮ちて行くのは確かに平生自分に覺えがあると大に
煩悶懊惱を極めた。娘は何んとも致方なく晝夜兼行して京
都高倉學寮に至り此有様を香樹院師に申し上げました。そこで

香樹院師は怒つて曰はるゝには、「其様な奴は、自分の勝手に地獄へ行く奴じや致方がない」と言ひ放ちて襖の中に入られた。聞かして貰ふと思ひながら来りました娘は失望落膽をいたしまして日が暮れて御暇をいたさうとしました。すると弟子の一人が可哀相に思ひ、最う一度話してやつて下さいと願ふと、香樹院師は再び諭さるゝやう「今迄地獄行きのものとは分らんんだか」と叱られた。此れは地獄行きのもの、悪さいたづら者である。真宗の念佛行者のかねて口では言ふて居る事であるに、死際迄分らなかつたとは何たる事だと云はれたのであります。又師は「其地獄行きものを助けて下さる御本願じやぞよ」と言はれた。其處で娘は初めて地獄一定助からぬ者を助けて下さる本願の大悲であると戴き、飛ぶやうに歸つて、半狂亂の體で居る親に向ひ「其地獄行きを助けて下さる御本願じやぞよとの仰でありました」といふなり、親は大安心をしたとの事でありました。是活きた二河白邊であります。

又江洲の了信香樹院師の臨末に参りて自督を述べて曰く、「間違はさぬと呼んで下さる御呼聲をさして間違はして下さらぬこと、いたゞいて居ります」と。香樹院病床にて仰せらるゝには「それは悪い、間違ふの、間違はぬとは、穿鑿じや、其

様なことは八十通の御文に一ヶ所もない、助けてやるうと呼んで下さる仰せをさいて「ハイ」とふりむくばかりじやぞよ、丁度落し咄の落ちた様なものじや、落ち口のわからぬものには面白くない。此落ち口のわかるとわからぬとが宿善ごとじやぞよ」と。是即ち歎異鈔の「地獄は必定すみかぞかし」とスツフリ落ちて、しかもいかにも「地獄におちたりともさらには後悔すべからず候」と本願を信受せられた樂々した境界である、是即聖人が法然上人に遇ひたまひし前念命終後念即生の御自督である。(親鸞上人御誕生會席上講話)

或る人、諸國渡りの同行を泊めて、夜酒を勧めたるに、件の同行いと見苦しく亂醉す。主人之を見て、私心の様を見せて下されたと思ふ。翌朝その同行前夜のことを詫言たれば、主人また私への意見也と思ひぬ。然るにその夜もまた酒に亂れたれば、主人大に腹立して夜の明るを待ちて放逐せり。後に至り主人つら／＼我が先になせしこと、淺聞しかりしを悔ひて、師に逐一申し上げたれば、

稽古したことや、京似したことは、なか／＼緩かぬものぢやとの仰せなりき。
まことに悪性凡夫の自性なれば、やめようとして止められぬもの也。佛のものな助け給ふ也。(香樹院語錄)

講 話

不可思議の信

(求道學舎日曜講話)

近 角 常 觀

今日の題は「不可思議の信」と仕て置きました。此の不可思議と頂く處が實に他力信仰上最も有難く尊い處で、他力廣大の御慈悲を慶ぶ上からは、何事を言ふにも此の不思議といふ言葉が付き添うて來るのであります。蓮如上人の「御一代聞書」には

佛法に厭足なければ法の不思議をさくとすへり。云云。と仰せられて、佛法を聴くにも唯斯くの如き筋合ひと聴くのでは無い。法の不思議を聴かねばならぬのである。其の法の不思議は佛法を厭き足り無く愛樂すれば、何時の間にか得させて貰へるとのお示しである。又「和讃」には、

いつゝの不思議をとくなかに、佛法不思議にしくぞなき。佛法不思議といふことは、彌陀の弘誓になづけたり。成程佛法の不思議は天地間に充ち満ちて下されてあるが、其の佛法の不思議は「彌陀の弘誓になづけたり」と、佛が我々を助けて下さる御本願が不思議である。此の本願の不思議の外に佛法不思議といふ事は無い。一言に申せば佛法といふも阿彌陀佛の本願の不思議以外に無いのであります。

度々申す事ではありますが、我々が佛教を頂くにしても、佛教の佛教たる處は何處であるか。真に大悲の恵みを頂き、法の不思議を頂いて信する、言ひ換ふれば眞實佛法僧の三寶の恵みを信するのが佛教を信するのであります。此の三寶を信ずると信ぜぬとは、眞の恵みを頂くと頂かぬとである。佛法僧の三寶を頂くといふと甚だ軽い事のやうに聞えるが、現に彌陀の名號を稱へ、本願の謂れを聴いて居つても、眞實如來の不思議を頂かぬ者は、極樂に往つても眞實の報土に生れる事は出来ぬ。化土に生れて三寶を見聞する事の出来ぬ身となるのお誠めもある。此の如來の不思議が無ければ我々凡夫の往生は六かしい。夫故佛法不思議といふ事も、此の如來のお力の不思議を信じ、此の如來の法の不思議を信する、唯此の御不思議を頂く一つである。「佛法不思議といふことは、彌陀の弘誓になづけたり」であります。

又言葉を代へて申せば、我々が弘誓を信じ、本願を信じ、名號を信するにしてからが、本願なり弘誓なり名號なりを唯聞きわけ知り分けた丈けなら信じたとは言へぬ。親鸞聖人が淨土眞宗と、特に眞の字を入れてお示し下された眼目は何處に在るかといふに、則ち誓願の不思議、名號の不思議、佛意の不思議を信するといふ、此の不思議を頂くと頂かぬとが、眞宗と他宗とのけじめである。此の事は今迄も度々申したのであります。親鸞聖人の「和讃」を拜見すると、初めから終迄到る處に此の不思議の文字をお用ひなされてある。先づ最初の冠頭の和讃には

彌陀の名號となへつゝ、信心まことにうるひとは、

憶念の心つねにして、佛恩報ずるおもひあり。南無阿彌陀佛々々と「彌陀の名號となへつゝ、信心まことにうるひとは」である。如來廻向の眞實信心は我々が自分で作る信心では無い。如來の御まこと心が届いて下されたのが信心である。其の如來廻向のまことの信心を得る者は「憶念の心つねにして、佛恩報ずるおもひあり」で、忘れ度くても忘れられぬ、常に佛恩報ずる思ひがある。實に有難い和讃であります。皆さんも常々「和讃」をお喜びの事と思ひますが、私も毎朝勤行の折に拜讀して今更の如く氣附かせて貰ふ事が甚だ多い。此の和讃の如き、口に南無阿彌陀佛々々と念佛を稱へつゝ、心中透き通りて佛の廣大なる慈悲を喜ばせて貰ひ、佛恩報謝の心の止むに止まれぬ味ひが如何にも有難くお示し下されてある。而して此の次ぎが即ち裏の方から疑ひをお誠め下されたものである。

誓願不思議をうたかひて、御名を稱する往生は、宮殿のうちに五百歳、ひなしくすくとどきたまふ。前のは「彌陀の名號となへつゝ、信心まことにうるひとは」である。此の稱へるは道理理屈で稱へるて無し。唯何の計ひも無く南無阿彌陀佛々々と稱へて、信心を慶ぶ者の事である。處が此の和讃は「誓願不思議をうたがひて、御名を稱する往生は」である。念佛を稱へながらも本願の不思議を疑ふ者の事である。疑つて居る者は自分では疑つて居ると思つて居らぬ。疑つて居ると思ひつゝ疑ふ者は無いのである。疑ひながらも自分では之で可いと思つて居るのである。南無阿彌陀佛々々と口には念佛を稱へながらも、此の者を見捨て

べからずである。

斯く氣を付けて見ると、親鸞聖人のお勧めには不思議といふ言葉の無い所は無し。又の『和讃』には、南無不可思議光佛、饒王佛のみもとにて、十方淨土のなかよりぞ、本願選擇攝取する。無碍光佛のひかりには、清淨歡喜智慧光、その徳不可思議にして、十方諸有を利益せり。南無不可思議光佛のお光には、清淨歡喜智慧のお光がましまして我々を照らして下さる。故に何時の間にか我々心中の貪欲願悲愚癡の思ひが消されるのである。又

至心信樂欲生と、十方諸有をすゝめてぞ、不思議の誓願あらはして、眞實報土の因とする。此の和讃も矢張り不思議の誓願である。至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺と、佛は不思議の誓願顯はして、我々を眞實報土に導いて下さるのである。又次には、彌陀の大悲ふかければ、佛智の不思議をあらはして、變成男子の願をたて、女人成佛ちかひたり。

佛か女人成佛の爲めに廣大なる大慈悲心から重ねて第卅五の願をお建て下された事は、實に佛智の不思議である。故に「彌陀の大悲ふかければ、佛智の不思議をあらはして、變成男子の願をたて、女人成佛ちかひたり」であります。斯く頂いて來ると、親鸞聖人の御教化には殆んど不思議のお言葉の附いて居無い所は無い。此の不思議を頂くと頂かぬとが、即ち彌陀の本願を頂くと頂かぬとである。

給はぬ慈悲とは充分に頂けずして、所謂「歎異鈔」の

くちには願力をたのみたてまつるといひて、こゝろにはさこそ悪人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそたすけたまははずれとおもふほどに、願力をうたがひ他力をたのみまいらすることろかけて邊地の生をうけんこと、もともなげきおもひたまふべきことなり。

の仰せの如く、本願で助かる、他力を頼むと言ひつゝも、心の中では悪人を助ける本願と言ひながら、矢張り善き者こそ助け給ふらめと思つて居るのなら、誓願の不思議をば信せず、疑ふ者である。其の誓願不思議を信ぜぬ者ならば如何に稱名念佛しても、宮殿のうちに五百歳、空しく過ると誠め給ひたのである。茲が親鸞聖人の御教化の眼目、眞の恵みを頂くか頂かぬか、右に行くか左に行くかの別れ目である。其のけじめは何處かと云ふに、即ち不思議の一字である。名號不思議を信ずると信ぜぬと、誓願不思議を信ずると信ぜぬとによつて決するのであります。

猶ほも一つ言ふ時は、抑阿彌陀佛とは何うであるか。親鸞聖人は南無不可思議光佛と仰せられてある。不可思議といふは我々が道理理屈で考へたり言へたりするのなら不可思議では無い。何うかといふに我々如き罪深き者に、佛は飽迄附き纏はりて、右に左に種々に善巧方便して、遂に我々を救ひ上げて下さる。如何にも不思議の佛、不思議の名號である。故に南無不可思議光佛であります。我々は此の廣大なる慈悲に氣が附いて、一念不思議と頂きつる上は兎角の御計らひある

の方で申す時は、疑惑和讃の上には、此の不思議を信ぜぬも

の故、善い者が助かる、悪い者は助からぬなどといふ考を起し、如來のお慈悲に疑ひを挟むやうになるとお誠め下されてある。夫は何うかといふに、佛智の不思議をうたがひて、自力の稱念このむゆへ、邊地懈慢にとどまりて、佛恩報ずることろなし。罪福信する行者は、佛智の不思議をうたがひて、三寶にはなれたてまつる。疑城胎宮にとどまれば、佛智の不思議をうたがへば、自業自得の道理にて、七寶の獄にうりにける。佛智不思議をうたがひて、善本徳本のむひと、邊地懈慢にむまるれば、大慈大悲はをざりけり。佛智不思議をうたがひて、罪福信する有情は、佛智の不思議をうたがひて、胎生のものとしたまふ。宮殿にかならずむまるれば、不思議の佛智をたのまねば、自力の心をむねとして、三寶の慈悲にはなれたり。胎宮にむまれて五百歳、罪福信じ善本を、佛智の不思議を疑惑して、罪福信じ善本を、修して淨土をねがふをば、胎生といふと、きたまふ。斯くの如く聖人は繰り反し、佛智不思議を疑ふ罪過をお知らせ下されて、直ぐ引き續き聖徳皇太子奉讃の劈頭には宜しく、

佛智不思議の誓願の、聖徳皇のめぐみにて、正定聚に歸入して、補處の彌勒のごとくなり。此の廣大なる佛智不思議を信ぜぬとは、實に罪深き事であるが、今自分が此の不思議を信ぜさせて貰ふに至りたは、全く

聖德皇子が誓願不思議を顯はして自分を引き込んで下された御恩であると喜びなされたのである。又同じ和讃の中には、聖德皇のあはれみて、佛智不思議の誓願に、すゝめいれしめたまひてぞ、住正定聚の身となれる。久遠劫よりこの世まで、あはれみましますしるしには佛智不思議につけしめて、善惡淨穢もなかりけり。とも仰せられてあります。

偕て以上は親鸞聖人の示される淨土真宗の骨目は、此の佛智不思議、誓願不思議の外に無い事を『和讃』の上で話致したのである。之よりは此の不思議の力が人生上加はりて下さる有様に就き話致さうと思ひます。

夫は諸方面に現はれるのであります。親鸞聖人は第十八願で往生淨土の大益を得る事を難思議往生と申されてある。

何故かと言へば我々如き惡凡夫が、不思議の本願力一つで此の度び往生淨土の大益を得る事は、實に何とも思議すべからざる事である。故に難思議往生である。又聖人は『教行信證』の初めに宣はく、

竊に以みれば難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり。云云。

如何にも佛の本願の廣大なる事は、何とも思議する事が出来ぬ。實に難思の弘誓である。或は又信心の事を廣大難思の信とも申されてあります。斯くの如く親鸞聖人は阿彌陀佛の廣大なる慈悲を言つて言語の絶え果てた時は、いつても不可思議、難思議、名號不思議、誓願不思議、佛智不思議と言つてお出になるのである。其處で我々が其の不思議を不思議と頂

いた心持も、又言語の絶え果てた所である。彼の點が何うであるとか、此の點が斯うであるとか、區別して言ふ事は出来ぬ。唯心中如來の御不思議、本願の御不思議、名號の御不思議と頂く外は無いのであります。

就いては今日私が此の題を出しますに際し、最も私の心に響いてあつたのは、先日來度々お話する私の友人西川理學士の入信の有様であります。此の事は既に再々申したのであります。併し同君の病氣も昨今彌々危篤に迫つて参つたので、私も長い間同君が非常に熱心に求めて下され、日曜講話毎に必ず來聴して下されて、多年の間親しき交りを結ばして貰うたにつけ、彌々今度は別れに臨むかと思ふと、言ふ可らざる心淋しさを覺えるのであります。併しながら多年の間聴かれた『歎異鈔』の導きと、『唯信鈔』の手引きにより最後に廣大なる難思の本願を頂かれた有様を味はうて來ると、頂かれた人も不思議である。又其の有様を見せて貰うた私も不思議である。唯不思議と仰ぐ外は無き事故、毎々なれども一度話し度い。殊に同君が信仰に入られた順序がひと際有難いのである。といふのは何かと言ふに、御縁によつては今迄念佛一口稱へぬ者、講話一席聴かぬ者でも、御縁到ると慈悲に氣の附く事がある。夫は第十八の難思議往生の御親心が心中に徹到して下さるのであるが、西川君の入信の順序は之と異り、或る意味から言へば今日の最も進歩せる學問を修めた人、最も氣象の立つた人が信仰に行かれる道行きを最も標本的に示されたものと私は頂くのであります。

初めより申しますと、同君が何故私の信仰をお聴き下され

たかと言ふに、初めてお遇ひした時より兎に角私のお慈悲を喜んで居るのが偽りて無いと思つて下されたのがもとである。て健全の時より私の『信仰之餘瀝』や『信仰問題』を常に人にも紹介して下され、茲五六年の間は皆さんが御存知の如く日曜毎に來りて講話を聴き、告白を聴いてお出で下されたのである。けれども御縁が至ら無つた爲め、唯聞き分け知り分ける事のみ努めて居られたのであつたが、最後に何から自分自身の上に慶ばれたかといふに、實に昨年以來不治の病氣に罹られて、一層苦心して聴き、苦心して難誌を讀まれてからである。先日も申した事でありましたが、本年の『求道』で二河白道の譬喩を病床で讀まれ、實に斯く無ければならぬと思ふが、併し自分は如何に一心正念になれと言はれても、何うしても一心正念になんて成る事が出来ぬ」と言はれた。其の時私は、「一心正念に成らうと思つて成るのは無い、直に來れ」とある如來の呼び聲を其儘頂いた心持が一心正念なのである」と話したが「何うしても自分にはいかぬ、唯念佛を稱へるのが一番善い」と言つて一緒懸命に念佛を稱へて居られた。久しき以前より念佛は稱へて居られたのだ相であるが、此時からは聲に顯はして私の持つて居る念珠を手を取つて申された。斯く念佛は頻りに稱へて居られたが、併し何うも未だ眞實の安心は得られ無い。念佛を稱へると不思議にも身體が樂である、氣持が善い。併しながら氣持の善い爲め、身體を樂にする爲め念佛を稱へるのは本當で無い」と自分にも言つて居られた。久しい間講話をお聴き下されたのであるから選擇本願の筋合ひは隅から隅まで解かりきつて居られるのであ

る。けれども何うしても眞實の安心が得られ無つたといふのは、唯一つ如來の御不思議といふ事が頂かれ無つたからであります。

て或る時私が申したには「佛には果遂の誓ひといふ事が有つて、苟も念佛を稱へた者は、必ず救はずには措かぬと言つて、下さるのである。斯く稱へて居る中に必ず信仰に引き入れると言つて、下さるのである。夫は兎に角とするも、今現に貴方の口から念佛が出て來るのが不思議で無いか。其念佛を稱へると、現に身體が樂に成るのが不思議で無いか。此の不思議を能く頂かせて貰はねばならぬのである」と話しました。すると「夫に違ひ無し」と言つて居られるが、矢張り眞實の安心は得られぬ。而已ならず其の後に於ても自分から『歎異鈔』の第拾壹章の、

誓願の不思議によりてたもちやすくとなへやすき名號を案じいだしたまひて、この名字をとなへんものをむかへとらんと御約束あることなれば、まづ彌陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいづべしと信じて、念佛まうさるゝも如來の御はからひなりとおもへばすこしもみづからのはからひまじはらざるがゆへに、本願に相應して眞實報土に往生するなり。

の御文を示して、「茲が解れば可いんだけれども」と言つて居られる。處が其中に私が、ふと氣が附いて喜ばして貰うたのが『唯信鈔』の深心を釋せられた處の御文であります。其處の御文を一寸拜讀して見ると、少し前の方より言ふ時は、深心といふは信心なり。まづ信心の相をしるべし。信心と

いふはふかく人のことばをたのみうたかはざるなり。……たとは人ありて、たかきしうへにありてつなをあらして、このつなにとりつかせてわれしうへにひきのほせんといはんに、ひく人のちからをうたがひ、つなのよはからんことをあやぶみて、手をささめてこれをとらずはさらにかしのうへにのぼることをうべからず、ひとへにそのことばにしたがふて、たなこゝろをのべてこれをとらんには、すなはちのぼることをうべし。佛力をうたがひ願力をたのまざる人は菩提のさしにのぼることかたし。たゞ信心の手をのべて誓願のつなをとるべし。佛力無窮なり、罪障深重の身をおもしとせず。佛智無邊なり、散亂放逸のものをすすつることなし。たゞ信心を要とす。そのほかをかへりみざるなり。云云。(全文は本號求道欄にあり)

實に自分は罪の深い者である、如何に願力深しといふとも自分如き罪深き者は何とも仕方が無いと言つて居るなら、佛の廣大なる佛力を疑うて居る者である。又自分が偶善い心持になつて喜んだからとて助かるやうに思つて居るなら、佛力を頼むにあらずして、自分の心を當てに仕て居る者である。我々の眞實頼みとすべきは何であるか。此の我々を飽迄見捨て給はぬ佛の本願唯一つである。て高き岸の上より人ありて一條の綱を下して、此の綱につかまれと呼んで下された時は何うであるか。若し我々が岸上に上りて、其の綱が確かであるか何うか、其の綱を持つ人が確かであるか何うか、といふ事を調べてから掴むと言つて居るのなら、我々は其の綱を掴む必要が無い。既に是れ自分で岸上に登り得る人なのである。佛

方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺といふ願力の綱が居て下さるばかりである。此の廣大なる本願が、我々が自身を亡す矢先きに向つて投げられたる一條の綱である。是が握られずに居られやうか、掴まずに居られやうか。此綱がちぎれるか否や總してもて存知せぬのである。所謂『歎異鈔』第二章の

親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらずべしと、よきひとのおほせをかうふりて信ずるほかに別の子細なきなり。

で、我々は唯南無阿彌陀佛々々と其綱を掴むばかりである。今眼前に在る此の綱が、佛より掴めと賜はりたる綱である。我々は之を掴まずには居られぬ、頂かずに居られぬ、念佛を稱へずには居られぬのである。我々岸の下に居る者の眼からは唯其の綱が前に下りて有る丈しか解らぬ。其の綱が如何なる仕掛であるか、其の岸の上が如何にあるか、そつといふ事は我々として言ふ事は出来ぬのである。補處の彌勒を初めとして佛智の不思議をはからふべきことは候はず。親鸞聖人が『行卷』に南無阿彌陀佛の廣大なる功德をお示しなされる時『選擇集』を引かれて、

選擇本願念佛集に云く、南無阿彌陀佛、往生之業、念佛爲本、

と、唯是丈しか仰せられて無い。私は從來親鸞聖人が何故もつと叮嚀に選擇本願の譯を此處に言はれ無つたかと不審に思ふ事が度々であつた。今思ふと此處は譯を言ふべき所では無いのである。我々が本願を信ずるは譯を聞いて信ずるのでは

智の不思議といふ事はさうでは無い。我々は如何にしても岸上に登り得ぬ者なのである。岸上の境界があつてあるか、斯うであるか夫は我々では計る事が出来ぬ。所謂唯佛與佛の智見の境である。然るに我々が其の佛の境界を彼れ是れと思議して、願力が解つてから頼む氣で居るのは、夫は願力で助かるのでは無く、自分で佛に成るのである。『歎異鈔』にも、唯信鈔にも彌陀いばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なればすくはれがたしとおもふべきとさふらふがし。(中略)おほよそ惡業煩惱を斷じつくりしてのち本願を信ぜんのみぞ、願にほころぶもひもなくてよかるべきに、煩惱を斷じなばすなはち佛なり。佛のためには五劫思惟の願その詮なくやましますさん。

と仰せられてあつて、我々が自分の罪の輕重によつて本願の佛力に計ひをつけ、自分が善い心になられぬから助からぬなと思つて居るのは、畢竟するに本願の佛力を欺ひ、自分で岸上に登りて如何なる人が居るか、如何なる方法で引き上げるのかを取調べてから握らうと云ふのである。既に岸の上のところが分かる位なら握る必要はない。又抑々本願の綱を下し給はる必要は無い。何故佛は岸の上より呼びかけ給はつたか、何故本願の綱を下し給はつたか。我々は如何にしても岸上に登れぬ者なる事を豫て知し召し下されたからである。否此の儘放つて置けば今に身を亡す者なる事を御覽下されたからである。我々に於ては何事のおはしますかは知らねども、自身を亡す矢先きに向つて、南無阿彌陀佛の綱を投げられた事が何より有難い。人生唯此の廣大なる本願の綱——設我得佛十

無い。今水中に沈むといふ時に、上より一條の綱を放られたら、只夫を掴む、夫丈げである。若し我々が如來のお慈悲を頂くに、夫が如何なる道理理屈であるか、夫を知つて信ずるのなら不思議でも何でも無い。然うては無い、今我々は水中に溺れんとする何とも仕様の無き者なのである。然るに其者に向つて其者を飽迄見捨て給はぬ廣大のお慈悲であると聞く時は、其の綱が切れるか、切れるまいか、そんな事を言つて居る處では無いのである。茲になると『歎異鈔』の

念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふらふ。そのゆゑは自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちさふらはははは、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらははは。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかすかし。云云。と頂くばかりであります。併しながら茲をうっかり讀んで、仕方が無いから綱を掴むのだと、不思議の佛力といふ事は打忘れて無理やりに信ずる事のやうに思つてはならぬ。選擇本願とは何かと言ふに、此方が仕方の無き奴なる故、南無阿彌陀佛の六字をお與へ下されたのである。其の本願の不思議が屈いて下された一念は、三世十方の只中に、唯南無阿彌陀佛ねども、唯南無阿彌陀佛の一ある而已である。地獄も極樂も眼中には無い、唯願力の不思議である名號の不思議である。此の

如く致方のなきもの、爲の本願名號は如何なる廣大の恵みなるかと頂いた一念が、本願の綱を掴んだ所でありませう。

今日は端なく『和讃』を讀む事になりましたが、聖人は又宣はく、

若不生者のちかひゆへ、 信樂まことにときいたり、
一念慶喜するひとは、 往生かならずさだまりぬ。

平日讀む『和讃』であるが、うっかり讀んで居つては解からぬ。我々が安心させて貰ふのは、獨りて安心するのでは無い、若不生者の誓ひ故である。佛が本願に於て若し生れずば正覺は取らぬ、設へ如何に有らうとも此の信心を知らせて救はにや措かぬとお誓ひ下された。其の若不生者の誓ひの故に、信樂まことに時いたりである。又の『和讃』には宣はく、

諸佛方便ときいたり、 源空ひじりとしめしつゝ、
無上の信心おしへてぞ、 涅槃のかとをはひらきける。

眞の知識にあふことは、 かたきがなかになをかたし、
流轉輪廻のきはなきは、 疑情のさはりにしくぞなき。

矢張り此の『和讃』にも時いたりである。我々が時いたりてお慈悲を頂くは、お慈悲の頂かれた時お慈悲が来て下されるのでは無い。もとく佛に不取正覺の誓願がましますからである。其の誓願ましますもの故に、時いたりてお慈悲を頂くのである。其の頂いた時は口も言葉も絶え果て、「何事のおはしますかは知らねども忝けなきに涙こぼる」と喜ぶばかりである。偕て頂いて見ると、今迄念佛を稱へると樂になる杯と言つて居つたは以ての外で有つた。此の危き此世に本願の綱がさがつて居て下されて、此の綱が自分に届いて下された

へて居る。斯くして行くのなら死んでも少しも遺憾は無い」と言つて、南無阿彌陀佛々々と喜んで居られる。今朝も講話前に参りますと申されるには、「自分は今迄氣に入らぬ者が有つた。——之は同君が極めて眞地目の性質故、利益の考などある人は氣に入らぬのである。——夫てつゝ夫を表して顯はした事で有つたが、今氣が附いて夫は自分の親切が足ら無つたのであると思ふと、少しも不足が無くなつて仕舞ふた」と言つて居られる。そうして病人の自分の方から却つて家の人や看護の人を慰藉して喜んで居られるといふ有様である。其の様子を私が横から見せて貰ふと、其事自身が既に不思議である。何も六かしき不思議では無い、見た儘が不思議にも不思議である。此不思議の御力の中に我々が生息させて貰ふのであると思ふと、實に有難い。

斯く味はせて貰うて來ると、今の若不生者の和讃には、一言一句も浮いた處が無い。「若不生者のちかひゆへ、信樂まことにときいたり」である。物の地上に墮ち來るは地球に引力が有る故である。我々の心中に信樂の時到り給ふは、誓願の御力が引いて下さるからである。若不生者不取正覺と、佛の方に必ず助けずば措かぬとの誓願力が在します故、遂には其の廣大のお慈悲が我々の心中に到り届いて下さるのである。若し此の大慈大悲の恵み不在しませば、お慈悲が我々の心中に到り届き給ふ時は無い。『自然法爾章』の中には我々にお慈悲が頂ける有様を示し給ひて、

彌陀佛の御ちかひのもとより行者のはからひにあらずし

とは如何なる不思議のお慈悲であるか。如何にも南無不可思議光佛であると解らせて貰へるのである。聖人は『眞佛土卷』に宣はく、

謹て眞佛土を按ずれば、佛は則ち是れ不可思議光如來、土は亦是れ無量光明土なり。

又『和讃』には、
不思議の佛智を信するを、 報土の因としたまへり、
信心の正因うることは、 かたきがなかになをかたし。
振返つて此れ迄の順序を考へると、能くも斯く迄自分の上に種々に手を變へ品を變へてお知らせ下された事とお恩の程を彌々慶ばせて貰ふばかりであります。

て私はずと『唯信鈔』の此の御文に氣が附いて非常に喜ばせて貰ふた所から、以上の意味で西川君に話しました。すると其後に訪ねた時同君は非常に慶んで居られて、「あゝ自分も長い間自力の念佛を稱へて居たが、とうど此の間の君の話で他力の念佛を味はせて貰ひました。彌陀の誓願不思議を信じた杯とは自分のような者は言へぬけれども」と喜んで居られる。其の廣大の不思議力に氣附かれた有様は、實に何うも話をする自分の方が耻ぢ入る位である。一體今迄からが非常に同儕深き、極眞地目な方であつたのであるが、併し今迄は何處と無く心に物足らぬ擡梅であつた。て私としては友に此のお慈悲を知らさいて別れては、友人甲斐も無いと思つて居つたのであります。此間も行くと言はれるには、「自分は今迄身分に合はしては非常に過分な生活をし、病氣に對しては充分な手當てを受け、又心には如來のお慈悲を聴聞して念佛を稱

て、南無阿彌陀佛とたのませたまひてむかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもはぬを自然とはまふすやときよとてさふらふ。云云。もおもはぬを自然とはまふすやときよとてさふらふ。云云。能く思ひ合はすれば、佛の誓願が御不思議である。其の誓願の御不思議で種々に善巧方便して我々に無上の信心を與へて下さる。其の御方便が又實に御不思議である。其の方便の御不思議で、遂に信樂の時到り、一念心中に喜びが顯はるゝや、名號不思議の念佛が顯はれて下さる。其の一念の信樂を頂いた者ならば、必ず滅度に到らしめて下さる。唯々御不思議と頂く外は無いのであります。(六月十三日)

山中靈城曰く。私、前年師に謁して、私は御聖教に常に拜見致せども疑ひが晴れませぬ故、何卒御一言の御教誨を御願ひ致しますと、申上げたれば、師大に呵したまひ。

御聖教を拜見しながら疑ひが晴れぬか。そんなものには聞かせやうがない。今日からは魔王の弟子になつたがよい。必定汝は平生から三寶を輕んじ念佛もろく／＼申さぬてがなあらう。そんな外道に聞かせる事はない。早う寺に歸りて五尊さまへ御詫言申すがよい。

とて嚴つつけ給ひしかば、私は冷汗背に流れ、身の毛いよ立ちて恐れ入り、まことに私は袈裟かけた外道なりと、あやまりかへつて佛前に御詫言を申し上げ、その後再び師に見えて、以前の顔を和らげ言葉もゆるやかに、

そうぢや／＼。謙敬してよく／＼聴聞すりや、疑ひとうても疑はれぬが佛の御慈悲ぢや。

『香樹院語録』

聖傳

ヂヤータカ釋尊傳

第廿五 賭に勝ちし牡牛

世尊ジエタバナに於て、「六」と名づけられたる僧の妄語を深く戒められき。

嘗つて「六」は人に對し、罵詈をほし、憍慢を事として、僧等の平安をかきみだし、十不善業を以て、人々を惱ましたり。僧等はこれを大聖に告げ奉りぬ。世尊は直ちに「六」を召したまひて、それを問ひ正して曰はく、「比丘よ荒き言語は不快なり、獸さへもこれを厭ふ、或獸は酷き言葉もて彼に語りし人をして數千金を失はしめし事ありき」とて次の譚を語りたまひぬ。

嘗てガンダーラの王ガンダーラの地なるタツカシラーに統べし時なりき。菩薩は牡牛の生をうけたまひき。

彼いまだ若き小牛たりし時一人の波羅門僧或信者が牛をば僧に獻げんと欲せしかば此牡牛を受けぬ。

されば彼はこれをナンダヴサーラと名づけ痛く愛し恰かも己が子息の如くあつかひて粥よ米よと愛養しけり。

菩薩なる牛は追々成長して一人ごちける様、「此波羅門は我に大に氣づけて養へり。印度の大陸に我にまさりて重き荷を

荷ふ牛はあらし、されば、我れ波羅門をして我力を知らしめんと欲す。而して彼の恩に報ゆるため、我力を以て彼の爲に生計を立てなばいかに」と。

一日牡牛、波羅門に向ひて曰はく、「波羅門よ、汝は牧畜の市に行き汝の牡牛は百の荷物車を動かしか能ふと曰ひて一千金の賭をなすべし」と。

波羅門は富める農夫に行き、かく語りぬ。「汝は誰の牡牛が最も強きやを知るか」

「誰その牛もつよけれどしかし云はずとも我牡牛は國中に於て最も強しと信するなり」と答へぬ。「我は一疋の牛をもてり、何れの牛が荷を積みたる百輛の車を動かしか能ふか」と波羅門は云ひぬ。

「あな！何れの世界にかゝる牛ありや」と農夫は驚きぬ。「今我家にあり」と波羅門は答へたり。

「さらばそれに賭せん」

「よし、我は千金を賭せん」

かくて賭は成りぬ。彼は砂や砂礫や小石等を以て百輛の車に積み、一列に列べて共に確と車軸に横木を結びつけぬ。

時に彼はナンジヴサーラを浴せしめ、香米一升ほどを輿へ頸の周圍に花環をかけ、前車に牛を結びつけぬ。波羅門は車上に座を占め、おのれの刺針を高く上げて叫びぬ。「いざたて！菩薩！いざひけ惡漢！」

菩薩一人ごちて「彼は我を惡漢とよびぬ、我は惡漢にあらず」とて四足をつくばりて些かも動かざりき。

時に賭は農夫に落ちたり、波羅門は千金を出しぬ。かくて

波羅門は悄然と牡牛をひきて家へかへり痛歎に惱み居たり。

ナンダヴサーラは波羅門の惱めるを見、傍に來りて曰く、「汝は眠れるか」と。眠るとや！千金を失ひてなど眠るべき」

「波羅門よ我は汝の家にながく養はる、此間に壁を汚し其他迷惑かけし事ありや」と

「否決して」

「さらば、何故に汝は先に我を呼ぶに惡漢といひしや、そは汝の咎なり余の咎に非ず、行け今、而して二千金を賭せよ、然し此度はゆめ我を惡漢とよぶ勿れ」と。

波羅門は牛の云へるを聞き二千金を賭し前の如く車を結びつけナンジヴサーラを一方に御して他の方には材木の滑なるを輓の端より車軸の端にわたし横木の結び目と共にそをまきて堅くくゞり以て輓の動搖をふせぎたり、かくて一疋の牛もて多くの牛車をひきうる様になしぬ。

時に波羅門は車上に座しナンジヴサーラの脊を撫て、曰はく「起てよ我が美しき者!!ひさいだせ我が美なる者よ!!」と。時に菩薩は一大努力もて百車を前にひき出し最前の車の元の位置へ最後の車の來るまで動かしたり。

農夫は大に感じたるよしを云ひ遂に二千金を出し波羅門に與へぬ。觀覽者亦菩薩に大金を送りたり。全額は波羅門の有に歸しぬ。かくの如く菩薩は波羅門に富を授けたり。

かくて師は「六」を戒めて曰はく「惡しき言葉は如何なる者も快しとせず」とて偈もて誨へたまはく、

やさしくかたれ、ゆめむじま
言葉もちひそ、重き荷も

愛もて語る人のため

動きて富をさづけり。

時に師はさま／＼の愛語の徳を教へ因縁を結びて曰はく、「其時の波羅門はナンダにしてナンダヴサーラは我身これなりき」とのたまへり。

第廿六 老婦の黒牛

「積荷の重き時つゝも」この話は世尊ジエタバナに於て二重の奇蹟に就き語られき。

優れたまへる佛陀は其時二重の奇蹟を行じたまひ、しばし天上に止まりましましけり。やがてバヴサーラ祭の大日サンカツサの市に大なる行列にて降りましましぬ。

僧等は講堂に集まり師の徳を頌美せり。曰く「まことに匹敵しがたきものは如來の御力なる哉、如來の持したまふ行は誰人も持する能はず、例へ六師の「奇蹟を行す」「奇蹟を行す」と稱するも一つだに行ずるあたはず、實に如來の御力は無限なる哉」と。

時に師は來りたまひ、何事を語りあふやと問ひたまひしかば彼等は答へ奉りぬ。かくて曰はく「比丘等よ誰か我が持する行を持し能ふや、前世或獸に生れし時も我が牽きし荷の重さを他に牽きうるものあらざりき」とて彼は譚を語りたまひぬ。

今は昔、プラマダツタベナレスに政をとりし時、菩薩は牡牛の生をうけたまひき。彼いまだ若かりし時其持主これを或老婦に暫時預けおきし

が、己が住家をあがなはん爲に是を彼女に賣り畢りぬ。彼女は彼を息子の如く愛養したり。彼は直ちに「老婦の黒」と呼ばれて知れ渡りぬ。成長なし、時恰かもコリリユームの如く眞黒に、村の牡牛と共にさまよひ歩き、性柔順にして温良なりき。

村の子等は彼の角や耳や喉袋を捕へ或は彼に垂下し或は尾をひきて慰さみ、或は彼の脊にまたがりて乗りまわりぬ。一日彼一人ごちける様「我母はいたく貧し、殊に我を愛育するに多く勞し、恰かも己がまことの子の如く思へり、もし我人にやとはれて働かば彼女の困難を救ふをうべし」と

一日隊商の長ありて五百の牛車をひきゐて近きあたりの淺瀬に來かゝりぬ。彼の牡牛共は車を牽きいたす能はざるのみか、五百輛の車を二並になしたるその一つをだに動かすあたはざりき。

折しも菩薩は村の牡牛と共に淺瀬の近傍をさまよひ居たりき。時に若き隊商の長は牡牛の鑑別をなすに最も有名なる人なりき。されば、直ちに彼等のうち最もよく發育して車をひくに堪ふる牛なきやと調べはじめぬ。菩薩を見て、此の牛こそ堪ふらめとて牡童等にとひぬ。

「人々よ此牛の持主は誰人なりや、我は此牛に車を牽かせんと欲す、而して若し動かし得ば厚く酬ゆへし」と。「彼を捕へて、車につけよ、彼の持主は此あたりに住せず」と人々は答へたり。

されば隊商は彼の鼻に絲をつけ、ひきゆかんとせり。しかるに牛は一步も動かさず、菩薩はいひけんごとく報酬を約せら

積荷のあもき時いつも、

わだちのあとの深き時

いつもひかせよ「黒」こそは

かならず荷をばひきゆかん。

とて因縁を結び給ひぬ「其時「黒」のみぞ重荷をひくを得し。老婦とはツツバラヴァアンナにして老婦の黒は我身なりき」とのたまへり。

一、頼めとあるも、すがれとあるも、稱へよとあるも皆助くるくの仰せなり。天が地となり、地が天となる例がある
と、間違はさぬ、疑ふなよくと、阿彌陀様の直の仰せの聞こえるまで、骨折つて聞くべし。

一、なまじひに智慧も分別もなければ、たゞ善智識の教へにまかせて、ひたすらに往生を大切に思ふ人は仕合せものなり。
一、得た／＼と思ふは得ぬのなり。得ぬ／＼と思ふはなほ得ぬのなり。そんなことではない、と仰せられたり。
一、何事ば覺へずとも、かゝるものをお助けのお慈悲、命終らば佛になることの嬉しやと云ふ味ひは、是非に覺へねばならぬ。

一、見事たいて講釋する大學者でも、名高い道心堅固の念佛者でも、大庵鎮西の風したに居ると仰せられき。

《香樹院語録》

れずは行かざるべし。

若き隊商長は彼の目的は何なるかを知りしかば曰く、「君よ若しも汝が五百の車を動かさば、我は一輛につき二ペンス即ち五百輛にて一千ペンスを拂ふべし」と

菩薩は此時すゝみて行きぬ。人々は彼を車につけしに大に努力して遂に淺瀬をわたり對岸に荷揚げするに到りぬ。順次彼はみな悉く運びさりぬ。

かくて隊商長は五百ペンスを袋に入れ彼の首に結びつけた。牡牛おもへらく、「此奴は先に同意せし金高を興へず、されば我はもはや彼を此處より進ましめざるべし」とて、前車の行手にふさがり立ちて途を斷たんとせり。

隊商の長は彼の金高の少なきを憤りてならんとて又一千ペンスをくゝりて興へぬ。彼は一千ペンスをうるや否や、彼の母なる人にかへりゆきたり。

時に村の童等老婦の黒の頸につけるものは何ぞとさわぎ叫びぬ。されど彼は子等を追ひしりす母の許へかへりぬ。彼は血ばしりし眼して痛く疲勞せし様にぞ見えし。

「如何にして汝はこれをえしやよき子よ」と善良なる老婦は重き財布を見て云ひぬ。やがて彼女は牡童より事の次第を聞きて叫びたり。「妾は汝のかゝる勞苦によりて得たる金にて生活せん事いと心苦し、などてかゝる苦痛をばしのびて危険に身を置きしや」と彼女は温き水にて彼を沐浴せしめ、油もてこすり、飲物を興へ、よき食にて養ひけり。かくて共に樂しき生ををへしとぞ。

師此話をおはりし時偈もて曰く、

告白

分つたといふのは
分らぬなり

佐々木 博

私は今度近角先生の御仰によつて、告白させて頂きました。思へば、私程な悪人が、此世からの幸福者として貰いましたのは、一重に佛陀無限の御恵みによるのは云ふまでもありませんが、又近角先生の御教へと、葦原氏の常にからの御導きと、或る信の友の全情との御蔭で御坐います。謹んで御禮を申し上げます。

私は元來、寺院一眞宗本派の子弟でありまして、實に佛縁深い身であります。數年前より、基督教を信するようになりまして、常々純潔なクリスチャンライフを送りたいと思つておりました。

愈々昨年より、ミッションスクールに、籍をおく事となりました。此れからは、思ふように、神の道を歩む事が出来ること喜んでゐました。處が不思議にも、正反對な傾向が顯はれて來ました。それは、理論的基督教倫理とても申すような、倫理の講義を聞きすうちに、何となう云はれぬ疑ひが起つて參りまして、遂に無始無終、獨一主宰の神と云ふ事が分らな

くなりました。倫理の時間毎に、自分の不審な點を質問すると、教師は、私が冷笑的質問をすと思はれてか、遂に腹立せられました。之れてはとも、満足な答を得ることは出来ぬと思ひましたので、其後は獨りて、彼是と考へた……暫くは、他の學科はサテ置いて、聖書の註譯やら、基督傳やら、宗教の方面の書物やら讀んでゐました、けれども、私には分らなくなるばかりで、多少信仰の土臺が動さかゝつてゐることに。

或る日、氷川神社の森の中で、考へて居ますと、酒に酔つた十方が、鼻唄歌ひながらやつて来て、私に喧嘩をふつかけた。初めは、忍耐でゐましたけれども、あまりの事に、終に相手になつて、喧嘩に論をしまひました。……酔漢が立ち去りてから、云ふに、云はれぬ、哀痛を感じました。……「汝の敵を愛せよ」とは、常に守るべき教へてはないか、其れに高が土方相手に口論するなどは何事である、……私に實に、自分の淺ましい事を感じました。

其れから、考へて見ると、聖書の一句すらも行つて居ないのみならず、とても私には本心から實行する事が出来ないと思ひがつき、噫我れは神の道を行く事の出来ぬ人間である、基督は偽善者を憎まれた、私は其の大偽善者ではないかと思ふと、堪えられませぬ。熱心に神に祈りを捧げました、けれどもやはり、汝の敵を愛せよと云ふ、嚴命しか聞えませぬてした。

努力すれば努力する程、苦しみを増し、抵抗すれば抵抗する程抵抗は増加するのだと、はしなくも考へまして、今まで

親切に介抱して呉れる友人までも、見るさへイヤになつたり、友人が話して居るのを聞くと、自分を冷罵つてゐるやうに聞へる、無暗に腹ばかり立つて致方ありませんでした。廿日ばかりで病氣も全快しまして、年も暮れて、本年新學期になりますと、學校の方で、熱心に傳道が始まりました。人が熱心によつて居るのを見ると、羨しくてたまりません。一度は美しい信仰の本に、神を崇め讃へた事もあるが、然し今は何物もない、自分は動物と異ならぬ生活をして居るのではないかと思ふと、情けなくなりました。

自分は再び神の道を進むかと思ひました。けれども自分はどうしても神が有難くなれないのみならず、とても満足に進む事は出来ない、すると或夜つくつく、と、過去を考へ見ると、自分は佛門に生れて、佛飯で育つた體ではないかと、しみじみ感じました。母は避暑のときに、汝が如何程立身出世をして、御慈悲が分らぬようなら少しも嬉しくはないと云はれた。……噫、今迄の矛盾した生活、母や兄を偽つた生活、亡き父上は何と見てゐられるだろうと、堪えられませぬてした。それから今迄佛敎を外に見てゐたのは悪かつたと思ひます。是れから一つ眞面目に、佛敎の爲めにやつて見ようと思ひました。

其の翌晩、友人の處へ散歩ついでに寄つて見ますと、私に御安心の話などやり始めた。そして煩悶の苦痛を語り、最後に「此んなにして過したならば未來はどうなりませしよ」と云つた。其の場は何かかかか云つて歸りましたが、其れが氣にかゝつて致方ありません。其の時學校では統計を作ると

顧みなかつた佛様が、何となく、思はましたけれども、一學期の試験は迫るし、つい大なる煩悶にも陥らずに忘れてしまひました。全時に全く、基督敎の信仰も失せてしまひました。それから何時とはなしに、世の中は表面丈けて澤山だ、皆な偽りて暮してゐるやうに思はれ、まさかのときには、良心があるから大丈夫だと考へて、三四月の間は、全く無宗敎の界をさまよひまして、只五官の慾を満足させるのを唯一の慰めとし、樂しみとし、動物とあまり違はない生活をしました。實に今思へば危険な處でしたが、ある友の煩悶は私をして、御慈悲の方へ導きしてくれる事となりました。其の友が居なければ今頃はどんなに墮落して居るかも知れませぬ、實に友は私の救い主であります。

秋になつて、突然嫂が他界の人となりました。嫂は非常に達者な人で、まことに親切な人で、避暑のときは一所に樂しく暮したのに、一月たつたかたゝぬうちに、死の報知を受けようとは夢にも思ひませぬてしたので、吃驚しましたが、然し兄に全情をよせたばかりで、世の無常は深く感じませんでした。然るに葬儀の翌々日に嫂の母が死んだと云ふ。報知を手にしました。此の時は如何な私も、世の無常と云ふ事を感じました。然し未だ未だ無常を客觀視して居ましたので、我が身の事にひきあて、考へはしませんのでした。

其の後病床に臥せる身となりまして、陰氣な、薄暗い、寄宿舎の一室に、仰臥して居ると、種々と考へが起る。何となう孤獨と云ふ感じがする。人は自己以外には何等の全情もない者だと云ふ感じがする。病苦の爲めか、僻み根性が起つて、

かて、各自の信仰を書かせました。私は佛敎徒だと書いた、……口で云ふのは容易である、筆で書くのは易々たる事であるが、中心振り返つて考へると、何等の安心もない、御慈悲が頂けてゐない。自分は佛敎徒と云ふ資格でない、其の一夜悶へ苦しみて過しました。

佛の敎へに後を見せた私が、佛敎徒だと云つた、佛敎を亡すものは私のようなものではあるまじかと、熱い涙が湧き出づる、……兄が白眼みつけてゐる、次第に兄の顔が亡父の顔となる、悲しいような、恐しいような目で見てゐられるかと思ふと、バツト消へて、母が顯れて涙で、なきはらし目て、私をじつと見て、汝のような、不幸兒は佛様に對して相濟まぬ、亡父や、先祖に對しても相濟まぬ、おまへが御慈悲が頂けるまでは會はぬ、……何處へなりと行け、……寺に生れて、佛の御慈悲も知らぬ不幸兒は、子とは思はぬ、……悪かつたと御わびをしようと思へば、煙が一抔起つて、苦しくて苦しくてたまらぬ、苦しい苦しいと、云ふかと思ふと、夢てありました。

考ゆれば考ゆる程、自分がなした事は偽善であつた、母や兄に、外の兄弟以上に、心配をかけながら、親切も分らずに、種々邪推ばかりしてゐた。追想して見ると、一編の罪惡史である。毎日すること、なすこと、皆罪で、何だか罪が加はつて行くやうである、斯んなにして行つたらば、未來はどんなになるだろう、思へば思ふ程苦しくなる、學校に行つても學科など少しも實が入らぬ、何の爲めに學問するのか、知識が進歩すればなにになる、はては自己の存在が分らなくなる、

遂に學校に行くことも止めて、冥想する、……亡父の死、祖母の死、姪の死、嫂の死、其の母の死、臨修の有様などが、活動寫眞のように思はれる、自分もやがては、死の門に行かねばならぬ、あゝ死なんと迄思つたが、……然し死んだら他人は氣の毒だと許しても呉れようが、私自身の罪は消えまい、依然として滅すまいと思へば死ぬ事も出来ぬ、……噫、死に勝る苦しみてした。遂に五日五夜の間は一醉だにせず煩悶しました。

西方遙かに、紫色に色とられた富士が、夕映美しき中に淡く淡く見えてゐる。其の景色を見て、嗚呼美しいと思ふも、瞬時に消へて、沈みゆく太陽は明日復東から立ち昇るが、自分も永久に暗黒場裡に沈み行くのであるまいかと考へ出す。憂晴しと、あたりの本を見ると、悲哀とか滅亡とか、云ふ字が際立つて目につく。壯快な秀吉の傳記を讀みても「なにわの事は夢の夢なり」と述懐を見ては何と云ふ慘憺たる事である、桃山城裡、花の如き生涯を送つた彼秀吉、英雄と云はれ、人傑と歌はるゝも、彼れ自身にとつては、無意味なものであつたらうと考へる、何だか人の努力が何等の意味もなせず、死の關門に吸ひ込まれるゝような感じがする、此時は何もかも私を苦しめる種でした。近角先生の懺悔録を拜見すると、先生の煩悶のとき、室内を爪立して、クルクル廻つたとありますが、私は四疊敷の中に、あちこち歩き廻つて、散らしてゐた本の上を、飛び廻り、木炭をとつては、手あたり次第書き散らす、たまたまなくなると、寝込んで、存分泣く、全く狂人の沙汰でした。

てくれます。特に姉や姪やは、心から喜んで呉れます。此の罪の深い私を、叔父さん〜と云つてくれます、實に何とも云へぬ喜びの感が致しました。然し私の心中には、未だ御慈悲を頂けませぬ。其の中親族の人の長男が死んで、遺骨が來ました、此の人は、年も私と三つ四つしか異はず、兄弟同様に暮して、私が歸國する際は新橋で見送つてくれましたのに、十日たつか立たぬのに、白骨となつて歸りましたのですから、堪りませぬ。寄宿舎で苦しんで居たときは、忙中親切に介抱して、呉れましたのに、介抱された私は、生き遣つて、介抱した元氣な青年が別れて十日目に死にましょよとは、夢にも思はん處でした。實に此の時、世の無常と云ふ事を本當に感じ、若しや、今度御慈悲が分らずに死んだら、大變だと深く心に思ひました。

分らぬながらも、務めて御念佛も稱へ、御勤めもし、又兄から本を借りて讀みました。友も亦時々手紙で、御慈悲の事を教へて呉れますので、何だか分つたようになりました、其の時は分つたと喜んだものです、御慈悲は斯んなものだなどと喜んで居ました。——今から思ふと所謂懈慢界におちて居たのです、——兎角するうちに、病氣も直つて、再上京して友に對しても分りましたと、大意張りで讀んだ本の話などして得意になつて、盛んに理屈など並べて喜んでゐました。處が分つたのはよかつたが、一向有難くない、九段で先生の御話などきいても同じ事ばかりで、一向有難くない、先生や、友みたように、感謝の念佛も出ない、どうも不思議だと思ふが分らない、どうも何だか物不足感じがしてゐた、……先生の念

其の内に、再び腦を悪くしてしまつて、熱が出たり、頭痛がし出したりして、其上病苦で苦しめらるゝ事となりました。病苦薄らいて、眠つたかと思ふと、夢を見る、……大きな火の玉が縦横に飛び廻る、じつと見て居ると、自分も火の玉と一所に廻り初める、苦しくて〜致方がない、助けて呉れと云つても、何人も救つてくれぬ、唯何處となく、罪の報ひと云ふ聲が聞える、ハット思ふと、夢が醒める。

寢れば悪夢を見るし、醒ればジン〜頭が痛むし、此の時の苦しきは、御推察を願ふより外はありません。

勿體ない話ですが、罪業深重の凡夫も、佛は見捨て玉はず、攝取して下さるとは、一時の氣やすめではないかと、思ひました。あゝ自分はこんな求めて、苦しんで居るのに、御助け下すつても、よかりそんなものと思つた事もありました。京都の友に、苦痛の一端を書き散らして、御慈悲を教へてくれと云つてやりました處、返事に、君の煩悶を祝福すと云つて來ました。何だ此の苦しいのに祝福もなにもあつたものじやないと、其の當時恨めしく思ひました。

それから何程苦しんでも過去の罪が消へる譯でもなし、又御慈悲が頂ける譯でもないから、氣長がに、御聖教を讀むとか、御説教を聞くとかしたがいと思ひましたから、佛教の本など讀みました、そして、氣永に求めよ〜と思ひました。又催眠薬で眠るようになりましてから、病氣も餘程樂になり、醫師の勧めに従つて、直歸國療養する事にきめまして、頭痛がとれ、身體が少し直ると、急に歸國致しました。

國に歸りて見ますと、母や、兄夫妻並に姉が、眞心で慰め

珠の例など一向呑込めぬ。

之れは自分が懈怠から斯くであらうと、一生懸命になつてやつて見る、どうも分らぬ、どうしても分らぬ、どうしても有難くない、分つてゐるのに、どうしても分らぬとは不思議だと、方んで見るけれども中々解せぬ。處が段々苦しくなりて、段々其の筈みがつつてきた、……斯んな者か知らぬ、あんな者かしらんと、考へても分らぬ。遂に五月十二、三日の兩夜葦原氏にたづねた。種々御話がありましたけれど、一向分らぬ、其時葦原氏が言はるゝには、君は我が強い、自分が偉いと思つてゐる、口でこそ悪人だの、分つてゐると云ふが、尙自分は偉いと、思つてゐる、そんな理屈はよしと近角先生の處へ行つて御法話を聞くと、紹介状を書いて下さいました。それから十五日に九段へ參りました。其途次友の處へ寄つて分らぬ〜と云ふと、あまり六かしく考へるから分らないのです、そゝ理屈ばかり考へては、頂けるものではないませぬ、理屈は御止めなさいと云ふ。それから愈々近角先生に會つて見ると、分つたと云ふが本當に分つてゐないのだ、分つてゐると云ふのが、即ち御慈悲が頂けぬのだと、頭かけにやられました。先生は同情をして下さるだろ〜と、豫期してゐたのに、ガラリと、はづれて、恨めしくなりました、先生の御眞意も知らずに實にすまない話です。懇々御諭しがあるけれども、唯ハイハイと御返事するばかりで、少しも分らず、遂に其儘御別れして電車で歸途に就きました。車中考へて見ると、葦原氏も、近角先生も、同じような事を言はれる、之れは自分の考が間違つて居るのではないかと、

ふと氣付きました。

其の夜歎異鈔を拜讀致しますと、——此迄何度も讀みは讀んだのですが、——云ふに云はれぬ感じか、身體中にズンズン響き渡る二度——三度讀み了つたとき、……始めて本當に、自分の淺しい、罪業熾盛の凡夫であることが分ると同時に、此の私のために御苦勞遊した御佛の御慈悲が、初めて私の心に頂かせて貰いました。——此邊の事はどうも書かうとしても書けず、とても云ふ事も、書く事も出来ませんから、御推讀を願つておきます。

懺悔の涙は瀧のように出る。……發狂したのだろうと、氣づかつた人もある位でした。……全く思へば、泣かずに居られない、……此の私見たような、淺しい、罪業深重の、何一つ取柄のない者を、御助け下さるの御慈悲を思へば、……歎異鈔一卷初めより終りまで、實に御慈悲の塊りです。……どこが有難いの、そこが有難いのと云ふ事は、今私は出来ません、一字一句皆悉く有難いのですから。

噫!! 私に求めよ、さらば與へらるべしとか、ノックしなれば、戸は開かないと思つて居ましたが、慈悲の親様は、十劫の古より、救の門戸を廣くあけて待つて居たのでした、少しも御叱もなく、待つてゐた、待つてゐたと、御聲……唯南無阿彌陀佛と申すより外はありません。

それから、葦原氏も、大層御喜び下さいますし、又早速先生の處へも御伺い致しまして、御禮申上げますと、先生も、大層御喜び下さいました。國元へも、通知しますと、大層喜ん

思へば何もかも、親様の引き廻してした、氣がついたの、分つたのと申しましたが、皆な親様から、分らして貰ひ、氣づかせて貰いましたのです。實に親様の御慈悲は、一度よりは二度、二度よりは三度、聞けば、聞く程、讀めば讀む程、益々廣大な事を分らして貰います。

彌陀の五劫思惟の願を、よく案すれば、ひとへに、親戀一人が爲めなりけり。……

思へば、阿彌陀様は、私一人を救はんがために、十劫の昔よりの御苦勞、祖師聖人は、本地を隠して、私一人のために、御苦勞下さいました。嗚呼思へば、思ふほど、私一人を救はんの御本願、何と御禮の申上り方もありません。嬉しさ過ぎるに、つい長くなりて相すみませぬ。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

問て曰く、阿彌陀佛を稱念禮観して現世に何なる功德利益あるや。

答て曰く、若し阿彌陀佛を稱すること一聲するに、即ち能く八十億劫の生死の重罪を除滅す。禮念已下も亦是の如し。十往生經に云く、若し衆生有て阿彌陀佛を念じて往生を願すれば、彼の佛即ち二十五の菩薩を遣はして行者を擁護して、若し行者若し坐、若し住若し臥、若し晝若し夜、一切時一切處に惡鬼惡神かして其の便りを得せしめざるなり。觀經に云ふが如し。若し阿彌陀佛を稱念して彼の國に往生せんと願へば、彼の佛即ち無數の化佛無數の化觀音勢至菩薩を遣して行者を護念し給ふ。復、前の二十五の菩薩等と百重千重行者を圍繞して、行往坐臥一切時處若し晝若し夜を問はず、常に行者を離れしめ給はず。今既に斯の勝益有します、恐むべし、願くば諸の行者各至心を須めて往くことを求めよ。云云。

〔善導大師〕

て呉れました、次のような返事が来ました、一寸御目にかかけます。

「前略、拙者生來未曾有の、快通信を頂き、再讀三讀、實に不可思議の因縁を隨喜致候。大悲の親様の懷裡に、抱かれたる事を、知らしてもらいたる安心は、實に金剛不壞の大安心にて、眞に人世の最大快事、何の喜びか之に及ぶべき、此の上は唯肉體のみの兄弟にあらず、眞佛子として、同一の信仰に、安住せしめられたる眞の兄弟にて實に隨喜の外無之候。之の上は、大悲の鴻恩を感謝し奉りつゝ、本願の大道を歩み玉ふこそ何より有難事に候はめ、之れに就ても近角先生の御教養の御恩と、葦原氏の御提撕の恩は深く深く感謝する次第に候。母上の御喜びは申迄もなく、亡父上様には金臺上さだめて破顔微笑兒等の信仰を喜び玉ふらんと存じ坐ろに、隨喜の涙に咽び申候。……後略」 兄より

「昨日はあてがみくだされありがたく存じます、まことに御しんじんをばいたされ、わたくしも、こういう、うれしき事はございません、娑婆のおやてさへ、未來のことをば、始終世話やいてゐたのに、さぞ十劫このかた、おまちくだされた、親様は、御満足とおもひます。わたしも、おまへが、おじひさへよろこんでくださるならば、何十萬圓の、身に、なられたよりも、うれしうござります、おまへのおかけて、ひとしほ喜びして、もらいます。……後略」 母より

哀悼

嗚呼珠光院唯信居士

安樂佛國にいたるには、無上寶珠の名號と、眞實信心ひとつにて、無別道故ときたまふ。如來清淨木願の、無生の生なりければ、木則三三の品なれど、一二もかほることぞなき。

珠光院唯信居士は親友西川藤吉君の法名である、吾人は遂に法名を以て君を呼ばざるべからざるに至つたことを悲むものである、君は今世稀に見る所の眞面目なる人であつた、眞摯剛直、一點浮汎の氣を許さぬ、徹頭徹尾眞實を以て終始した人格であつた、髣髴として君が直狀徑行一厘の修飾なき風手と態度とを想起する毎に、確に君は眞面目の權化たりしを斷言するに憚らない、此の如き性格たるが故に他人に對して非常に親切にして他の爲に身を犠牲にして盡すを常とし、又君が學術研究に忠實なる、實に一身を之に捧げ明晰なる頭腦と緻密なる實驗を以て空前絶後の大發明をせられた、即ち天然眞珠の養殖是である、是れ現時世界各國に於ける動物學者が腦漿を絞りて未だ曙光を認むることの出来なかつた問題であつ

た。然るに君は研鑽腐心の結果克く此學洋の渺茫たるを航海し盡して終に彼岸に達したる發見者である、君は實に學海に於けるコロンバスである、大膽なる計畫を敢行したる冒險者である、細心警戒險悪なる波濤を乗り越えたる成功者である、君が事業は恰も古來の法師三藏が求法の爲に葱嶺を越え流沙を涉りて印度に達したることを想起せしむ、かくして君が發見上陸したる新大陸は猶無人の境である、將來耕さるべき土地は無限である、開かるべき寶庫は無盡藏である、而して君は之か發明の爲に心血を瀝ぎ之を子孫後昆に遺して身自ら犠牲となりて斃れたのである、而して全國各所に養殖所を作り上げるために惡戰苦闘をして其事を創め、君が生前には自ら月桂冠をも被らず學術の爲に戰死したる勇士である、凱歌は君が死と共に世界に響きである、されど君は生きて之を聞かなかつたのである、否聞くことを好まなかつた人である。

已上は君が人格を描く爲に、君が學術研究の結果を一言したのである、蓋し此方面は將來其専門に於て顯彰せられて世人をして其功勳を知らしむることであらう、故に之を其方に譲りて吾人が特に言はねばならぬことは君が信仰上の結果である、即ち君が眞摯求道の曉、遂に偉大なる佛日の曙光を認

めたることである、研究上に於て眞珠の光明を發見したるが如く、精神上に於て無上寶珠の名號と其信心の光とを見出されたることである、是實に君が徳を讚嘆して珠光院と名づけたる所以である。

抑々私が君と相知を得るに至りたるは私が信念上よりあらはれたる事實につきて眞摯なる君が了解を辱ふしたるより起りたのである、固より當時君の立場は信仰に非るが故に信仰其物を了解するとは云へぬが、君か眞面目なる立場より信仰的事實を眺めて、其眞實なることを認められたのである、換言せば其事實を見て、私が抱ける信仰なるものが詐でないと確信せられたのが抑々結縁の始であつた、當時私は歎異鈔の「親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとの仰をかうふりて、信するほかに別の仔細なきなり」との信仰が私の唯一の光であつた、そして此度君が最後に達せられた唯一の信仰が同一の歎異鈔の文であつた、嗚呼想ひ回らせば一樹の蔭一河の流、皆是大慈大悲の御恵によりて引合せて下されたのである、私は當時山嶽の恩徳を君より受けたのである、而して今や最後に其大海の一滴を報恩することを得たる迄が皆大悲の廻向である、而して其事くる

恩徳は大悲の恵と共に永久たるが如く、報恩も亦大悲の恵によりて永久たることを誓ふものである。

君は信仰之餘瀝、信仰問題等を熟讀し、人にも之れを紹介せられた、而して平生、自ら求道學舎講話に來聽せられ、又人をも誘ひ來られた、随分熱心に求められたれど、性來の科學的頭腦を以て之を迎へらるゝ故に未だ人生問題に觸るゝに至らなかつた、昨年八月不幸にも君が不治の病を得られた時、實に君が一家を初め、親友一同、頓に闇中に投ぜられたのである、而して君か恩師飯島博士親友萩野君を初めとして痛恨極なく全心其回復を祈らざるはなかつた、而して之が君が人生問題に點火せられた始であつた、此時私は常に話したのが涅槃經の諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂の四句の偈、及び雪山童子の捨身求法の因縁であつた、眞に人生無常なることを自覺したるときが、如來常住の光明を仰ぐことを得る時である、然れども人生無常として思ひ切りて岸下に身を投ずることを得る所以のものは無謀の擧てはない既に如來の願力に攪まるゝからである、勿論吾人は其不治の病たることを明言せざりしにも由るならんが、君は其如來の願力を認むることが出來ぬ爲に大に苦まれた、されど獲信の爲に其病を明

言するの殘酷なる行爲を敢てすることは出來なかつたのである、幸にして願力の不思議を認められたならば、明言せざれども其病を自覺せらるゝ時節が來ることを確信したのである。當時君が最も熱心に反覆熟讀せられたるは選擇本願の講話であつた、而して其意義は了解せられても本願其物を信ずることが出來ぬに苦心せられた、されど此頃より私かに眞面目に稱名念佛せられたらしい、時々私に質された、全體老翁老嫗か譯なしに念佛して居る中に自然に難有くなるのではないかと、されど私は答へた難有くなる爲の念佛ではない、必ず一念開發の時があると言ふた、君今春已來二河白道の話を讀みて或時血を吐かんばかりの態度を以て叫ばれた、汝一心正念にして直に來れと言はれても我等は逆も一心正念になることは出來ぬと、實に知らず識らずの間に自力無効を叫ばれたのである、私は直に答て曰く我等いかてか一心正念となることを得べき、直に來れ、我能く汝を獲らんとの聲をさかば、自然に一心正念になれるのであると答へた、そこで言はるゝには、何はともあれ、念佛を稱へるに限る、論より證據、念佛しつゝあるときは病も怠り、心に樂なりと、我此語を聞きて初めて私かに念佛したまひしを知つた、乃ち曰く、法然上人も

念佛には義なきを義とし、様なきを様とすと仰せらる、念佛は稱へる爲の念佛である、唯何等のはからひもなく念佛するのである、念佛すれば病も怠り心も樂になるといふが、兎に角其事自身が不可思議に非ずや、此不思議を信するが即ち信心であると申した、此時予は伊勢一身田にて貰ひ受けたる宗祖所用形の珠數を贈りてたゞうら／＼と念佛したまはんことを勸む、君非常に喜びて念佛された、されど君は病が樂になりたいたいふ如き横着心を以て念佛する様なことではなか／＼黙目じやと時々申された、或時私は歎異鈔の十一節の末を引きて、如來は果遂の願があれば念佛すれば今生か次の生か、何れは救ひ果し遂げたまふことを話した、されど君は自分自身夫で満足することが出来ぬ、そこで同十一節の初、即誓願の不思議によりて持ち安く稱へ安き名號を案じいだしたまひてこの名字を稱へんものを迎へとらんと御約束あることなれば云云の文を指して、是が分ればよいのであると申された、此時分半夜床上燭を點じて歎異鈔を熟讀せられた、且つ曰く、我は岩にくらひついても生きて居たい、死にたくないといふ様な心はないと、唯信仰の一つを得て安心して瞑したいといふ切なる望が見えすぎてあつた。

に感謝の念が充滿して來た、又麻生兄上の贈られし氷詰の香魚を感謝し、嗚呼我は分に過ぎた贅澤な養生を爲し、あらゆる人の同情を荷ひ、又精神上には信仰上の満足と與へられ、今瞑すると雖、毫も遺憾ないと申された、且つ曰く、今こそ實に一心正念、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と念佛口を衝き出て、感謝極なき有様であつた、歎異鈔の親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとの仰せをかふりて信するほかに別の仔細なきなりといふは今我が君の教通り信する有様であると申された、嗚呼君は唯信鈔の教によりて信仰に入り、又聖覺法印の導きによりて聖人が法然上人の教を受けたまひし歎異鈔の告白が君の信仰其物となつたのである、是れ唯信居士の法名を奉りたる所以である。

君が信仰に入りたまひてより大慈大悲心は君が身に溢れてある、實に佛心の胸中に輝ける有様は何とも言ふべからざるものである、一日申さるゝには嘗て敵を愛するといふことをさ／＼ありしが、今にして我從來嫌惡敵視せし人も全く悲憐の情に堪へず覺えず涙を瀧くに至れり、是全く信仰の御蔭なりと、且つ曰く、信仰の難き容易の事にあらず、然れども如何なる人にも必ず之を得せしめたしと、夫人兄弟姻戚看護

時は五月二十一日、恰も麻生兄上か來られしとき、復來の誓願は名號の一つで助けんとの思召より外なきと述べた、君は兄上に向て、如何です、分かりますかと尋ねられた、此時私は思はず知らず、唯信鈔の岸の上より綱を下す譬喩を話した、且つ曰く、岸の上に入りて其境界やら、人やら、仕掛やら了々分明なるの後其綱を握らば如何にも確かなるべけれど、既に岸の上に入り得たらんには綱を執るの必要なけん、我等岸の下に苦みつゝある眼前に南無阿彌陀佛の綱あるといふは如何なる幸福ぞや、岸上の事は唯佛與佛の境界、補處の彌勤を始として佛智の不思議をはからふべきことではない、是實に君が彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生を遂くるなりと信じて、念佛申さんとおもひたつ心の起りたる一念であつた、君の舊友が其翌々日訪問された時既に大安心に住して居られた、其後二日私が君を訪ひたる時、君は中心より満足感謝の溢れたる音容を以て申さるゝには、嗚呼長々御世話になりました、君の御恩は忘れてはならぬ、先日話によりて全く自力の念佛は變りて他方の念佛になつた、難有々々として、爾來態度一變從來の眞面目に加ふるに中心の満足が溢れ來りて、夫人の忠實貞愛なる看護を初として、何事に對しても非常

婦にいたるまで必ず信仰を得へきことを遺囑したまひ、倫敦にある兄にも我信仰を告げよ必ず心を安せんと、洵に是れ四海兄弟同一念佛無別道故の眞精神の溢れたるもの、和讃に曰く、安樂佛國にいたるには、無上寶珠の名號と、眞實信心ひとつにて、無別道故とときたまふ、嗚呼君曩きに天然眞珠を發明し今亦無上寶珠を獲得す、而して此寶珠の餘光能く其遺族を照して同心一體君が破天荒の偉勳を八紘に光被せしむること掌を見るが如し、然れども吾人最終の光明土は是れ極樂無爲涅槃界也、一日予君を訪ふて曰く前途明々たりや、君答て曰く、明々ならず冥々ならず、平靜にして安穩なり、幸に安養の淨土に往生せば必ず俱に相見えん哉と、嗚呼是れ吾人千差萬別の人盡十方無碍の光明に一味なるの境にあらずや、和讃に曰く、如來清淨本願の、無生の生なりければ、本則三三の品なれど一二もかはることぞなき、是れ君と共に夫人遺兒兄弟姻戚親友俱會一處の靈境なり。

六月二十一日朝君が斷金の親友荻野仲三郎君、常の如く君を病床に訪ふ、君曰く我か爲に歎異鈔を讀めと、荻野君始めより讀みて十二章に至る、君靜思默聽感謝極なし、我午後訪ひて亦其續きを讀むこと二三章、晩兩人亦訪ふ、君病頗る篤し、

容貌崇高にして生身の佛陀に接するの想あり、曰く南無阿彌
 陀佛、南無阿彌陀佛、親鸞におきては………よき人の仰をか
 うふりて信するほかに別の仔細なきなりと、令夫人を顧みて、
 信仰を勤め、亦左右を顧みて信仰を勤め、稱名念佛絶ゆること
 なし、翌朝午前九時合掌叉手珠數を手にし病革る、衆皆馳せて
 枕頭に集る、一息一衰西方寂靜無爲の樂に還歸したまふ、働
 哭極なし、君が恩師飯島博士嘆して曰く、洵に是れ國家の大損
 失我一臂を断たるゝの想ありと。嗚呼、南無阿彌陀佛。

近角常觀謹誌

行誡上人

殺生戒
 我亦亦しとこそ思へなしと思ふいのちはおなじ命ならずや
 倫盜戒
 みるめこそ習はからめおりたてかづかば浦の藻やとかめむ
 邪淫戒
 まれくとも尾花がそては心せよあらぬ荒野にみちやまよはん
 妄語戒
 呼子鳥よべはこたふる山びこのそれもまことの聲にやばある
 慧可禪師
 少林のゆきにしたるくれなぬにそめよ心のいろあきくとも
 枯華微笑
 心なき嵐にもあるかつととて手折りし花はちりにけらしも
 蓮花のかたに
 はちす葉の露ばかりだによの中のにこりにしまね心もがな
 同
 露は玉なみは黄金のいけみづもこゝろにうかぶ花ばらすかな

歎 詠

明日

八 風

明日我が命ありやなしや、
 もとより其をばわれ知らず。
 さはれ明日若し生くとせば、
 明日我がものを飲まむこと、
 たしかに我は知れりけり。

海

波のまに／＼漂ひてこそ、
 動きゆらぎて定らね、
 高きいはほにのぼりて見れば、
 たゞ平けき青海原。

時 報

清澤先生七周忌

本年六月六日は清澤先生七周忌に相當するを以て浩々洞諸
 君の主催により豫定の如く五、六、七の三日感謝會及び講話
 會を催せり。先づ五日は眞宗大學講堂に於て、法要及び感謝
 會を催せり。南條導師の下に阿彌陀經及び正信偈三首引の勤
 行をなし、月見氏「我信念」を朗讀し、岡田文部次官まづ追悼
 の演説をなし、清澤氏が學生時代に於ける俊英衆にぬきんで
 たるを述べ、なほ當時の同僚は現時何れも顯要の地に立ち、
 中には榮爵を辱ふしたるものも少なからず、然れども是等の
 人は後世一基の石碑として存するのみならず、清澤師は千古
 精神的偉人として存するべし云々と述べたり。其他各地
 より上京せる、及在京の有志者代々立ちて所感を述べたり。
 而して最後に井上豊忠氏は知遇の恩を感ずと云ひて清澤
 師との断金の交を述べ歎歎これを久しうせり。是について
 稻葉昌九師立ち沈痛なる語氣を以て清澤先生の始終念頭を去
 らざりし事は眞宗大谷派と云へる事であつたと一言せられし
 時満場の會衆暗啞聲を吞んで泣く。而して先生遺児即往氏挨拶
 抄をなし、中村金藏氏の寄附にかゝる撮影ありて散會。

翌六日午前九段佛敎俱樂部に於て開會。齋藤唯信氏藤岡勝
 二氏等の講話あり、同日午後大學教室に於て開會南條文雄、
 深柳政太郎、曾我量深、吉田賢龍氏等の講話あり。七日、淺
 草本願寺に於て前法主臺下追悼の爲め讀經あり、引つゞきて
 村上專精、近角常觀、上杉文秀、近藤純悟、楠秀九氏等の講
 話あり、何れも盛會なりし。
 求道學舎に於ては六日午前の日曜講話に於て粉骨摧身なる

求道學舎第七回紀念日

六月一日求道學舎第七回紀念日は來りぬ。省みて思ふに學
 舎を開始してより既に滿七年の星霜を経たり。而して其間に
 ありては在舎求道の學生諸君は暫も定數に缺くる事無く、且
 つ年々幾名の諸君は必ず舎より出身して活社會の人となり人
 文増進の上に貢獻せられつゝあり。殊に吾人の感謝に堪えざ
 るは一度び入舎聽法せられたる諸君は其在舎中たると退舎後
 たるを問はず、必ず早晚何等かの要求に催うされて如來の
 慈心を得し給ふの一事なりとす。佛陀冥々の加護を蒙るに
 あらずんば何ぞ斯くの如くなるを得ん。洪恩まことに謝し奉
 る可きなり。例年の如く午後より紀念の集會を開く。在舎生は
 勿論、學舎出身にして東京に在任せらるゝ諸君は凡て來會せ
 られ、來賓としては萩野仲三郎氏、西川藤吉氏兄弟、百目木智
 雄氏臨席の榮を賜はりたり。唯長へに吾人の忘る可からざる
 は毎年臨席を仰ぎたる西川藤吉氏の、當時早く病狀重體に陥
 り、而して今や既に阿彌陀佛正覺淨華中の人ととなり給へるの
 一事なりとす。午後三時一同前庭に集まりて紀念の撮影を遂
 げ、夫より佛間に集まり恭しく「歎異鈔」を輪讀し、感謝の至情
 を捧げ奉る。近角の簡單なる感話あり。畢つて晚餐の食卓につ
 き互に往年を追想して歎語盡くる時無く、紀念として地方在
 住の學舎出身者諸君に繪葉書を贈呈したり。因にいふ、舎の杉
 本美之助君は本年大學の業を卒へて目出度歸郷せられたり。

夏と精神修養

近角 常 觀

學校の夏季休暇をば如何に暮すか、と云ふことに就ては、自ら種々の方法もあらうが、私は、自分自身の實驗に基いて『夏と精神修養』と云つた方面を述べて見やう。

私は、幼少の時から、山陽先生が親を見舞はれ、親を奉じて諸方を遊歴されたと云ふ話を聞き、又、瀧溪の周茂叔と云ふ人は、其の書生を屹度一年に一度故郷へ返して、親を記念せしめたと云ふことを聞いて、深く感じ、夏になれば、必ず親の家に歸ることに決めて居たのである。これは、十五歳の時に故郷を出て、京都で學問をすることになつて以來、最後の學校生活を卒へる迄は、殆んど規則のやうになつて居て、歸省を見合せた年と云つては一度もなかつた。

それから、大學に在つた時分には、同志の友達と共に、佛教の夏季講習會と云ふのを企て、休暇には、年々それに出席する事にして居た。講習會の第一回は明治二十五年の頃で、場所は攝津の須磨であつた。今日でこそ、須磨の浦と云へば、西洋人の館や、高貴の別荘で以て殆んど占領されて居るけれども、其時分は全くの田舎で、黠々たる茅屋 併し白砂青松と云ふ趣きは、寔に類なき絶景であつた。其の間に、學生達が寄集つて、清らかな講習會を開催したので、當時、東京から行く學生は、薩など擔いて、徒歩で以て出席したものであるが、これぞ、我國の佛後界が、夏季に講習會を開いたこと

の始まりで、基督教の方で云へば夏季學校と云ふ所である。

これに就て少しく前に述べたいと思ふのは、佛教の教典の中にも、夏季修養と云ふことが出て居て、昔しからこれを實行して居たのである。元來、印度では、夏季はレイン、シインと云つて、日々雨が續く。それで、この期間を安居と稱えて居た。謂ふ所の意味は、雨が連續的に降り、出水して、物を流すなどの出來事があるので、此場合に外出をしては、衣鉢を流し、蝨々たる蝨を殺し、又生々した青草を踏むやうなことがある。されば、一時遊行することを斷然止め、一定の場所を限つて、其所で靜かに修養を行ふと云ふことになつたからである。

右の安居に關して、昔しの書き物から要點を摘出する。
(一)佛は天明に臥床より起ちて、盥瀦し、衣をつけて禪室に入り、普く一切衆生の根機如何を觀察し、畢りて後、袈裟を被り、鉢を携へて、教化を受くるに堪えたるもの、住する方處に乞食し給へり。此行化は、佛一人なることあり、又多數の弟子を從へ給ふことあり。
(二)行化より歸り給ふや、佛は足を洗ひ、比丘衆を集めて法義を説き觀法を授け給へり。比丘衆は此に於て佛前を退き或は三兩相携へて法義を研究するあり、或は一人靜處を尋ねて獨居修觀するあり、佛は此に食事を了り、禪室に退き、正午少しく過ぎ、再び起ちて、觀察を行ひし後、四方より來詣せるものに對して説法し給へり。
(三)説法畢り、大衆退くや、佛は沐浴し、且つ園林に逍遙

し給へり。去りて本處に歸り給ふや、比丘衆は觀法研討の結果を告げ、疑惑するところを問ふて、佛の教を受け、以て日没に至る。

(四)比丘衆退くや、佛は諸天善神の爲めに説法して中夜に至る。
(五)夫より少時行歩して寢に就き給ふ。

これは、『緬甸佛傳』中にある、夏季に於ける佛の生活法を示したものである。されば、吾々が大體に於て此の規律を追ふて行くならば、個人の修養にも、大に得る處があると思ふ。即ち、前掲の五箇條の内容を、吾々の生活にあてはめて考へるならば、先づ第一、朝は早起して、冷水浴を行ひ、佛前に參詣して、最も嚴肅な朝の禮拜をする。

次に、本文には『禪室に入り』とあるが、これは今日はどう云ふ人間を教化しやうかと、一日の傳道の方針を定めてかゝるので、吾々もまた、その如く、今日一日を如何に暮すべきか、と云ふことの心積りを立てる。『乞食し給へり』は、一度び散歩してまはる事に相當する。

第二は、散歩を、はり、足を洗ひ、朝食をしたゝめて、其日の主な仕事をする。佛にして見れば、其時は多くの比丘衆を集めるとあるが、講習會では講筵を開く。個人ならば、最も修養に適切なる書物を讀み、其意義を深く味つて、無形力の力を我所有とする——一日中の一番肝腎な時間である。それ、他人數寄合つて話合ふ等のことは、食事の前後にすれば宜し。

第三には、説法了りて佛は『沐浴し』とある。印度は暑い

ら能く水につかるのだ。吾々は此時、海水浴をするなり、散歩をするなり、瀧に打たれるなり、一面愉快に、そして自由に暮さなければならぬ。

第四の『中夜に至る』これは、吾々の方では、信仰上の談話を開くとか、實驗談を語り合ふとかにあてられる。
第五は其日の最終時間で、私の方は、九時に禮拜を行ひ、そして寢に就くのだが、こゝで、日記をつけるものはつけ、又、朝に於て豫期した仕事、果して實行されたかどうか、即ち一日の行路を回顧して、一面反省の時間に、一面感謝の時間にあてるも好い。
斯くして、慰み半分ではなく、而も形式の嚴格なるよりは精神の方を眞面目にして行くならば、それを適用して、宗教上の講習でも、學術上の講習でも、但しは、學生團體の單なる避暑にしても、必ず相當の効果が擧るであらう。

○ 勿論、眞の信仰と云ふ立場から見れば、以上の如くするか、信仰に這入られると云ふ譯ではないが、信仰なくとも、比較的清らかに生活を續け得ることは事實である。そこで、私が何時も説く問題だが、結局、信仰の問題に及ばぬと、修養問題の解釋がつかないから、次に少しく、これも私自身の經驗を語りたいと思ふ。

明治二十五年に、同志と共に、私が夏季講習會を發起したことは、前にある通りであるが、今順序として其の會合の場所を列擧するならば、第一が須磨、次が鎌倉、それから三河蒲生郡の某所、三浦三崎、濱名湖近傍の新井村、陸前の松島

と斯う云ふ風で、毎夏開會したことであるが、私は發起者の一人でもあり、且つ又、其事業には實際熱心でもあつたので、會毎に必ず出席し、學生時代相當の修養をして居たのである。併し乍ら、其後、不圖ある疑問に逢着して眞面目な態度に立戻つて考へた時、結局第一回からの出席は、面白半分てやつて居たと云ふ事に氣が付くやうになつた。

即ち、第六回を松島で開いた其年の二月から、私は裏心に何物か不足を感じて、苦しみ出したのである、それで、七月の講習會の如きは、大苦悶中に過したやうな譯であつた。例年通りの心持であれば、友達と共に議論もする、散歩もする、そして愉快に會を了つたのであるが、其年に限つては、立派な講話も、美しい風景も、丸て眼につかず、耳にも入らず、友達が心地好げに話し合つたり、遊んで居るのを見ると、只もう馬鹿々々しく考へられて一時も早く納會にすれば好いとさへ思つた程であつた。當時に於ける私の心の告白は、拙著懺悔録に詳しく載つて居る。

されば、こゝで、私は何故に其心的動亂の苦中にさまよひ入つたが、この點に就て少しく述べる必要がある。そして、其の事は、只、修養と信仰との區別を語る事に於て、解明されると思ふ。

世間で云ふ修養とは、吾々が自分の作らへた規律の下に在つて、それを嚴重に守つて行く迄の意味である、信仰のない間の修養は即ちこれで、畢り律法主義となり、斯くせねばならぬ、斯く行はなければならぬと、自分で自分を鞭つて、

の光に攝取せられて、何時でも自由の天地に導かれ得る身であり乍ら、自分は自分の力で、自分の理想で、立派に世の中を渡る事の出来る人間だと思つて居たのが誤りであつた。と、斯う自覺して来て、改めて其の恵みを覺え、難有いと云ふ感謝の念の起るにつれて、非常な自信力が心の底に湧いて來た。これは松島の夏の大煩悶を通過した後のことと、一面から見れば、其大煩悶は、今日の信仰に入る關門であつたやうに思はれる。

○ 既に佛の恵みを受けて、大なる自信に到達した。即ち信仰である。この下に進む吾々は、世の何物にも恐れることはない。強い處を云へば、不如意な人生の何處でも、これを破り、これを碎いて進み入ることが出来るのだ。又、一旦自分の身を救はれたと云ふ經驗があるならば、今度は世の中のすべての敗者、弱者をも救はれぬと云ふことはない、と云ふ風の勇氣も出て來る。おちぶれた者程、不幸な者程、早く佛の恵みに引入れなければならぬと云ふ考へにもなる。

併し乍ら、吾々が信仰に入つて以降に於ても、勝手な心は矢張屢々起る。この心の有様は、吾々が一年間も別れて居た親に逢ふ事が出來て、初めの中は飛立つ程に喜びもするが、一箇月程も一緒に居て、珍らしくなくなると、一度感じた強い嬉しさも段々と減じて、終には喜びの對象とならぬ事になるやうなものだ、その如く、信仰に入れば、一時は喜ぶが、勝手が出て來る。自覺はして居乍らも、自分本來の性質は動もすれば頭を出す。

懸命に力めてやる事を指す。併し乍ら、この境涯では、未だ眞正の力は出ない。安心は尙更出ない。

こゝに戒律と云ふことがある。これも矢張確乎たる信念に到達せぬ迄のもので、規則に依つて、自分の身を縛ると云ふ丈の意味である。別語を以て云へば、一種の理想主義である。斯う云ふ風にあらねばならぬ、と云ふのは一つの理想に過ぎぬ。自分の將來達すべき目標、若くは、行爲の標準と云ふの外はない。

私が松島の講習會に臨む迄の遣り方は、丁度この理想主義で、この主義の下に、自分を飽く迄も支持して行かうとしたのであつた。所が、結局實行が出來ない。望み通りに行かない。例へばすべての他人に對して、隔てを置くまい、隔てを置くは人に依つて差別をつけるものだ、と云ふ考へから、誰にでも平等に、隠し立なく自分を提供しやうと力める。而も、それが何時の間にか忘れられて、妬みが出る、差別が起る、そして、最後には理想の破壊である。あゝ理想、律法、主義、此等は何と云ふ薄弱なものであらう、と、それから從來永い間依頼して、それに依つて安心を求めて居たものを、急に呪ふやうになつた。不信任を叫ぶやうになつた。其時、ゆくりなく、ちらと閃めいたのが、私の今日の信仰である。

其の信仰は如何なる態度で顯はれて來たかと云へば一種の革命と見ても好いかも知れぬ。心の状態が、手の裏を返すやうに、一變したのである。前の例を以てすれば、他人に對して隔てを置くまいとした考へが、既に間違つて居た。已に自分には恵みの親あり、恵みを蒙つて居る。自分は佛の子である。そ

けれども、信仰に入つた後には假令本來の性質が出て、これを以て本當のこと、とは思はない。そして自分で自分を省る。不必要な心を勞して、不必要な苦しみを迎へると云ふ風に見て、直に思ひ返へしてつける。これが信仰の力である。故に、この後の状態を以て修養を叫んでもよいが、それは、併し信仰以前の所謂修養ではないこと丈は、記憶して置かなければならぬ。

○ 私が、佛の恵みを感じて、自覺の境に入り、初めて安心の礎を定めたのは、その年の九月であつた。其時のことを考へて見ると、多年の間、私が獨りて修養をして來た事は、信仰に入るの道筋となつたには相違ないけれども、信仰に入るまでの所謂修養は、一面慰め半分て、自分では幾ら眞面目でも、結局自分で作らへた眞面目であつた事を白状するのである。併し、信仰に入つてからの自分の生活は、以前とは一變して了つて、全然宗教的に起居するやうになつた。無論、年毎に開催する夏季の講習會には、自分の精神的の記念となつた松島以後、(其間に洋行中にあつた夏を除いて)現今に至る迄新らしき用意を以て出席を怠らない。最も歸朝以來は、聴講者としてよりは、講演者の側に立つて、傳道の事業に従事して居るが、近來講習會と名附けられる會合が非常に多くなつた結果、當初私共學生の手に依つて設立せられた講習會は、自然必要を認めなくなり、只今では僅に不忍池の辨天境内で、極めて小規模な會合を夏毎に開いて居る。

歐羅巴から歸朝した以來は、此の一身を佛の傳道に捧げて日もこれ足らず、夏毎には、特に多忙を極めて居る。近く五六年間の經驗を云へば、毎年六月末から九月の初旬に至る迄、幾度か方面を變へて、南船北馬する。或時は、木曾の山中を通つて、尾張から信濃に出た事もあるし、越中から飛騨に出で、峠越しに同じく信州に出たこともある。又、四國九州などへは、屢々見舞つて、奥の方まで進んで行つた。昨年は北海道を廻つたが今年も九州に行く積りである。と、云ふ風に私の夏は、殆んど傳道の爲めに作られてあるやうなものである。けれども、健康が少しも衰へないのみか信仰の機運は年毎に増進し、且つ諸方の多くの法縁を結んで得る所が少なくなない。そこで私の經驗から推測すると、すべて吾々は、忙しければ忙しい丈、餘計に脩養が出来るものと思ふ。これは、私の夏の、傳道旅行に依つて、實際の證左を擧げて居るのである。

(中學世界)



夏期傳道日割

- 六月二十七日より七月二日まで 岩代若松求道會
- 七月五日より七日まで 名古屋講習會
- 全八日 尾張海西郡東條
- 全九日より十五日まで 美濃高須講習會
- 全十七日より十九日まで 東京不忍池大日本佛教青年夏期講習會
- 全二十一日より二十七日まで 讚岐高松講習會
- 全二十八日より二十九日まで 安藝竹原町
- 全三十日より三十一日まで 全 吳市青年會
- 八月一日より五日まで 福岡大學佛教講習會
- 全六日 直方
- 全七日 大隈
- 全八日 伊方
- 全九日 後藤寺
- 全十日 行橋
- 全十一日 四日市
- 全十二日 中津
- 全十三日 柿坂
- 全十四日 玖珠
- 全十五日 日田
- 全十六日 木屋
- 全十七日 吉井
- 全十八日 久留米
- 全二十日二十一日 美濃岐阜講習會
- 全二十一日後 九州彦根
- 全二十二日 九州愛知郡東園堂
- 全二十三日 九州蒲生郡内也
- 全二十五日より三十一日まで 能登國宇出津
- 九月四日より十日まで 越中

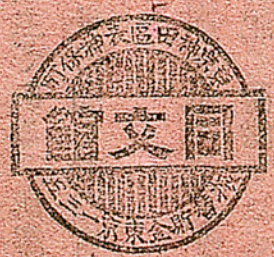
十八大名家執筆

哲學大學辭書

內容本見進呈

第一冊
七月十日
より御中
込順に從
ひ送奉

特價發賣 最低價
好條件



西洋哲學、哲學史、論理學、認識論、東洋哲學、南洋倫理學、印度哲學、神道哲學、佛教哲學、基督教、猶太教、心理學、兒童研究、倫理學、宗教學、美學、社會學、法理學、言語學、教育學、生物學、人類學、精神學、生理學、東西哲學史、其他哲學宗教に關聯する限り一切の方面に亘りて五千有餘の大項目と數万の細目とを密行し、大判二千五百餘頁の大紙面に収め、各項一々英、獨、佛、希臘、羅馬、印度、英語、巴黎波斯等の原語を付し八十餘名の大家各々其の擔當項目の下に署名して執筆せられたる責任ある大辭書にして、換羅の富、取捨の精詳、發解の淵博、説明の徹底、洵に驚嘆すべし殊に(一)其の西洋哲學、印度哲學、佛教哲學并に神道に關する者の如き歐米の如何なる哲學辭書と雖も竟に本書に及ばざること(二)大約一千の首條、遺跡、墳墓、其他の精密なる挿畫を以て説明を助けたること(三)殊に第一冊

價額互隔に分ちて發行し全部完蔵の上は製本實價金二圓を申うけて發售、美裝金三冊に合本

本書を讀へば直ちに其の妙奥を體るを得べく龍樹南天の鐵壁を開くが如きこと(四)全部完成の上は最も詳密なる内容索引及び英和、獨和、佛和、希臘、羅馬、梵語、巴梨、人名、對引等の各種大索引を附録し、編輯自在の活用を得せしむること等、越えての點に於て完備せる本書の特色中の大特色とせしむべきを確信す此の明治最高の文獻にして將來數十年間之を光輝を奪ふ者決して出でざるべき本書は今や極めて暫時の間最低の特價を以て適く有識の諸君に提供せらるる但し同文館は何等の試験を経ず此の提供を受納せん事を諸君に強うる者に非ず本日直ちに郵券の送りに先づ詳密美麗なる内容見本を請求せらるべし

假製金 五圓
定價金 二十三圓
特價一冊十二圓
特價五冊十五圓
郵税は別に申受く

近角常觀著書目

空文藏書目錄

訂正改版三版出來
金四十錢郵稅八錢

蔵書は必ず目錄を調製し置かれれば散逸し易く、また所要のときさぐすにも不便なるもの也。従て、目錄の調製は、常に蔵書家の苦心する所なり。本目錄は學者多年圖書館にありて得たる智識と經驗とによりて編成したるもの也。各自蔵書の多少にて頁數の増減をも自由ならしめ、また卷末に記號用紙をも附しあれば、蔵書家には至極便にしてなくてはならぬもの也。

清澤先生七回記念出版

清澤先生
澤柳政太郎先生序
曉鳥 敏 先生著

清澤先生の信仰

クロース 綴美本
四六版 四百頁
金八十錢 郵稅八錢

現代に指導者なしと云ふて居るは釋尊を知らなんだカピラバストの人民と同じ愚を演じて居る者である。清澤先生は現代の救主である。清澤先生を窺はざる者は眼を閉ちて世の闇を啣つ者である。
本書は先生の高弟たる著者、先生の絶筆『我信念』を掲げて、之講ずるに先生の傳記と語録を以てしたる著である。先生を知らうと思ふ者は、本書によりて先生の髓に入るを得るであらう。

發行所 東京 東區 本町三丁目 五三二 無我山房

多田先生著 二版出來
恩寵の宗教

金廿三錢 郵稅四錢

恩の思想は光の泉である、恩に氣のつかぬ者の世界は暗黒である。些ても是を知つてゐる者の天地には光が溢れてゐる。從來の東洋の思想界の根底にはこの思想が行渡つて居た。然るに新時代の人心にはこの思想が餘程薄らいてゐる。何となく生活の上に溢たみがなく、自殺者がふえ、評論の盛なのはこの爲である。恩の思想を中心とせる御教は茲に是非共唱へらねばならぬ『恩寵の宗教』をすゝむるはこの故である。諸者に慰安策勵のあたへらるゝことを疑ひませぬ。

懺悔録 附録 歎異鈔

第五版 定價 廿錢
郵稅 四錢
袖珍美本

本書は著者が實驗の信味に基づき、古來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と、最後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黒闇頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し之れ『懺悔録』の名ある所以にして發行以來本書を縁として入信の士に乏しからざるは吾人の私に感謝措く能はざる所。而して今回其第五版を發行するに及び、紙質製本等更に充分の改良を施せり。求道者諸君の必讀を冀ふ。

親鸞聖人の信仰

初版 定價 七十錢
小包料 八錢
クロース 綴

親鸞聖人の『教行信證』が聖人一代の信仰經驗の結晶にして、他力信仰界唯一の寶典たる事は既に諸君の知了せらるゝ所、著者入信以來此の寶典を以て自己が信仰の生命となし、日夕拜繙熟讀せる事既に多年、或は之を各地の講習會に講じ、或は求道學舍來訪の諸君と語り殆んど日として其の化を蒙らざる事無し。而して其實驗感佩の餘録を編述して茲に初めて世に公にしたる者を本書となす。固より聖人の偉大なる信仰は本書の能く盡す所にあらずと雖も、又以て讀者が聖人の信仰に接し給ふの一階梯たるに足らんか。是れ實に著書が至願とせる處なり。聖人の信仰に隨喜せらるゝ諸君の必讀を請ふ。

發行所 東京 東區 本町三丁目 五三二 無我山房

訂正
增補

信仰の餘瀝

第十版
定價 卅錢
郵稅 四錢
袖珍美本

本書は著者が拾餘年前端なくも苦悶の暗黒界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歳の迷雲一時に消散したる時、自ら其心的經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に其の修飾を加へず、ひたすら内心實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸にも發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、發賣部數既に一萬餘部に達し、本書を縁として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所、今や其の第拾版を出すに及び、更に根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に増補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附録として「予が信仰的實驗」なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根底は本書に於て最も明かならん。

冠頭 異 鈔

第三版
定價 五錢
郵稅 四冊迄貳錢
施本用小冊子

此の「冠頭鈔」は聖人の遺教を世に普からしめんが爲め、施本用小冊子として出版せるものにて、讀み易さやう字をまばらに植え、校正を嚴密になし、且つ冠頭を加へて諸聖教中より参照すべき文を引用し、親切に作りたるものなり。敎家諸君の御一顧を俟つ。

信仰之餘瀝要畧

初版
定價 五錢
郵稅 四冊迄貳錢
施本用小冊子

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に「信仰之餘瀝」中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を採録し、傳道用小冊子として印刷したるものなり。有志諸君の御試用を切望す。

近角常觀著

人生と信仰

定價 卅錢 郵稅 四錢

- 第一章 人生問題と信仰
- 第二章 悲觀思想と信仰
- 第三章 倫理力行と信仰
- 第四章 犯罪心理と信仰
- 第五章 社會問題と信仰
- 第六章 國家秩序と信仰
- 第七章 世界宇宙と信仰

本書は一昨年雜誌「求道」秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸氏の需要益々急切なる爲め、再び一冊として茲に發刊したるものなり。蓋し現代思想界の亂調は律法的敎訓、若くは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書を發行する所以也。

發行所 森江書店
發賣所 求道發行所

規定

- 本誌は毎月一回一日發行とす
- 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
- 郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
- 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
- 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
- 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 本誌定價左の如し

一部 一ヶ月 一六ヶ月 一年
金拾錢 金拾錢 金六拾錢 金壹圓拾錢 郵稅一冊に付五厘
●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十二年五月二十七日印刷
明治四十二年六月一日發行

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
發行所 求道發行所
東京市本郷區森川町一番地
(振替口座東京一六六九六番)

大賣捌所 東京市神田區表神保町 東京堂

發行所 東京市本郷區森川町一番地 發賣所 東京市神田區表神保町 東京堂

前號要目

求道

◎誓の力

自督

◎信樂開發と罪惡の自覺

◎矜哀の善巧

講話

◎念佛成佛是真宗

聖傳

◎チャータカ釋尊傳

第二十三

第二十四

惡しき交は善行を壞す
象と犬の話

近角常觀

告白

◎一々皆善巧

◎慚愧賀慶

慶談

◎十七憲法

第二條

近角常觀

能戶得一
小野島覺哲

紹介

◎學修法◎信仰五部書

時報

◎求道講話の近況◎清澤師七回忌◎夏期

傳道日割

求道第六卷第六號 明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可 明治四十二年六月一日發行 (毎月一圓一日發行)

東京市神田區安正一丁目二番一三號發售